

新・総合計画の策定に係る

市民インタビュー

平成 25 年 9 月

浜松市企画調整部企画課

はじめに

新たな総合計画は、計画期間を一世（＝30年）とし、次世代の揺るぎない未来の理想の姿を定め、市民の皆様が本市の進む方向性を認識した上で、地域活動や企業活動に励むための指針としたいと考えています。

策定に当たって、市民の皆様の意見を幅広く反映するため、産業や福祉、医療、都市計画、教育など様々な分野において活躍する皆様にインタビューを実施し、市の30年後に対する夢や期待、行政への提言などをいただき、この度、インタビュー集として取りまとめました。

今回皆様からいただいたご意見は市民意識調査に活用するとともに、策定委員会や庁内ワーキングの議論の基礎として活用してまいります。

インタビューにご理解、ご協力いただきました皆様に厚くお礼申し上げます。

平成25年9月

浜松市企画調整部企画課

インタビュー実施概要

- (1) 対象者 地域・業界で活躍される浜松市民、浜松市で活動するグループ、団体など
- (2) 実施人数 136人（組）（延べ人数：166人）
- (3) 実施期間 平成25年6月～9月

目次（50音順）

青木 美菜さん	1	小野 宏志さん	35
秋元 健一さん	2	梶野 尚之さん	36
安達 賢二さん	3	加藤 寛盛さん	37
阿部 恵美子さん	4	加藤 弥生さん	38
荒木 信幸さん	5	上嶋 裕志さん	39
荒田 梨賀さん	6	神谷 和輝さん	40
有谷 敏朗さん	7	加茂 博子さん	41
栗倉 敏貴さん	8	川合 正二さん	42
飯田 哲也さん	9	河合 正志さん	43
池貝 恭子さん	10	川口 好市さん	44
池谷 貴子さん	11	川瀬 幸嗣さん	45
石川 敦史さん	12	北村 敏治さん	46
石川 勝美さん	13	久保 真子さん	47
石野 好弘さん	14	黒柳 千穂子さん、大野 登志江さん	48
石原 慎介さん	15	公益社団法人静岡県宅地建物取引業協会	49
伊豆田 悦義さん	16	浜松支部の皆さん	
和泉 秀実さん	17	児玉 惇さん	50
伊藤 昌彦さん	18	小林 芽里さん	51
伊藤 基久さん	19	塩崎 明子さん	52
今田 和彦さん	20	重井 アマンダさん	53
井柳 誠さん	21	静岡文化芸術大学デザイン学部の皆さん	54
岩井 万祐子さん	22	静岡文化芸術大学文化政策学部の皆さん	56
内山 博之さん	23	清水 良和さん	58
浦 かおりさん	24	杉浦 悦郎さん	59
江間 敏雄さん	25	杉浦 政紀さん	60
太田 昌孝さん	26	杉田 智樹さん	61
大平 展子さん	27	杉山 公一さん	62
大村 淳さん	28	杉山 丈壺さん	63
岡部 佳忠さん	29	鈴木 雅矩さん	64
岡本 眞理さん	30	鈴木 研一郎さん	65
小栗 重晴さん	31	鈴木 純哉さん	66
小栗 勝さん	32	鈴木 孝裕さん	67
尾崎 真さん	33	鈴木 達徳さん	68
小田切 克子さん	34	鈴木 建也さん	69

鈴木 俊宏さん	70	仲村 由紀子さん	106
鈴木 政成さん	71	中安 千秋さん	107
鈴木 政子さん	72	中山 彰人さん	108
鈴木 真弓さん	73	那須田 摩美さん	109
鈴木 充代さん	74	野末 芳子さん	110
鈴木 基生さん	75	袴田 梢さん	111
鈴木 靖充さん	76	長谷川 智彦さん	112
聖隷クリストファー大学	77	波多野 千鶴子さん	113
社会福祉学部の皆さん		羽田野 美沙子さん	114
瀬尾 直樹さん	79	馬場 さかゑさん	115
関口 淑子さん	80	浜松開誠館高等学校生徒会の皆さん	116
曾根 晃一さん	81	浜松市立高等学校生徒会の皆さん	117
高根 美保さん	82	林 卓司さん	118
高橋 里織さん	83	原田 博子さん	119
高橋 ひょうまさん	84	平澤 文江さん	120
鷹見 早苗さん	85	蓬台 浩明さん	121
高山 春樹さん	86	堀内 秀哲さん	122
高山 ゆき子さん	87	松下 克己さん	123
田口 剛さん	88	松島 達也さん	124
田熊 恭子さん、稲垣 恵美子さん	89	松島 良友さん	125
竹内 茂さん	90	松本 健男さん	126
田代 剛さん	91	南畑 直由さん	127
田力 剛さん	92	宮崎 篤郎さん	128
立岩 恵子さん	93	宮田 洋さん	129
田中 利昌さん	94	森下 亜希子さん	130
田中 充さん	95	森本 悠己さん	131
田野 聖一さん	96	八木田 昇一さん	132
田畑 隆久さん	97	山下 いづみさん	133
堤 京さん	98	山下 正義さん	134
鶴見 英夫さん	99	山田 夏子さん	135
Dimas Pradiさん	100	山森 達也さん	136
土橋 登巳代さん	101	吉田 和子さん	137
豊田 光彦さん	102	吉田 さゆりさん	138
中西 博雪さん	103	吉田 美恵子さん	139
中村 新治さん	104		
中村 美詠子さん	105		

あ お き み な
青木 美菜さん

静岡文化芸術大学 4 年生

●浜松でなければ体験できない「音楽」

プロムナードコンサートなどまちなかで音楽に触れられるところが浜松の良いところ。昨年秋には、やらまいかミュージックフェスティバル in はままつ、バンバン！ケンバン！浜松、ハママツ・ジャズ・ウィーク、浜松国際ピアノコンクールといった音楽イベントが6週連続で行われた。連続したイベントは単独開催よりも効果があるし、県外の人への宿泊も見込める。

このうち、「バンバン！ケンバン！浜松」は、文芸大で行なわれたこともあり、参加しやすいイベントだった。大学が関わったり、市民が参加できたりするイベントがもっとあればよい。

私は、小学生から高校卒業までジュニアクワイア浜松に入っていた。母も前身となる児童会館少年音楽隊に属し、姉もジュニアオーケストラ浜松に入っていて、音楽のまちの発展に関わってきた。また、アクトシティ音楽院の主催者養成セミナーを受講し、コンサートの企画・運営について実践を含めて学ぶことができた。いずれも浜松に住んでいなければ体験できなかったことであり、社会人になっても音楽に関わっていければと思っている。

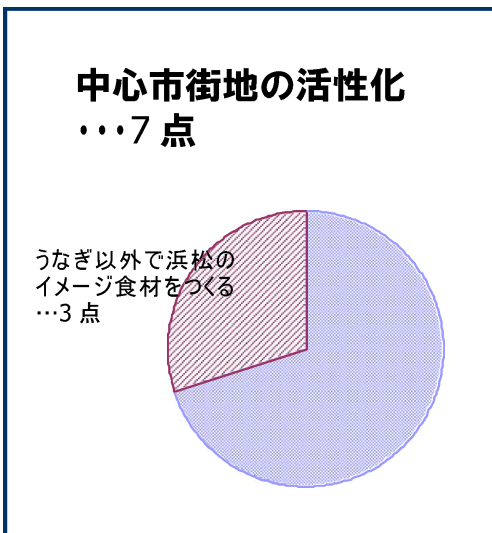


[青木美菜さん]
平成24年度のミス浜松。1年間の活動を通じて多くの人と交流を持ったことは大きな財産となったと語る。また、大学の卒業研究では、浜松市児童会館少年音楽隊について調べている。

●アートやデザインで中心市街地を盛り上げて

静岡市の中心市街地のように小さい店にも頑張ってもらいたい。そのために、若者が中心市街地でも出店できるように、土地、オフィスや店舗を安く提供できるなどの仕組みをつくってほしい。また、市民の興味を引くために、アートやデザインを前面に出して盛り上げていく方法も考えてみたい。

また、浜松駅にも工夫が足りない。例えば、駅を降りたら浜松独自の音楽が流れるなどの工夫があればよい。市が出世大名家康くんをPRしているにも関わらず、駅でグッズを買えるところが少ないことも残念だ。



【浜松市への期待度グラフ】

●うなぎ以外のイメージ食材を！

浜松といえば“うなぎ”というイメージがある。しかし、ミス浜松の活動をしている中で、浜名湖の漁師から「浜名湖には他にも取れるものがあるから、うなぎばかり推すのもどうか」という話を聞き、牡蠣の養殖なども盛んであることを知った。うなぎの価格が高騰する中で、別の海産物も推しても良いのではと感じた。

あきもと けんいち
秋元 健一さん

株式会社ドルフィンキッズプロダクション 代表取締役

●天下取りを育てたまち、浜松

私は東京生まれだが、子どもの頃は夏休みの大半を浜松で過ごしていた。野菜や魚介が新鮮で非常においしかった記憶があり、自然も豊富で何もかも素晴らしく魔法の国に来たように感じていた。その影響もあり私の店で使っている食材の95%は浜松産である。その頃から徳川家康公が好きで、負け戦も多かった家康公がなぜ天下を取れたのか、興味を持っていた。家康公が若く、血気盛んな時期にこの地で生活していたということは、浜松の食材、環境が天下取りを育てたということである。

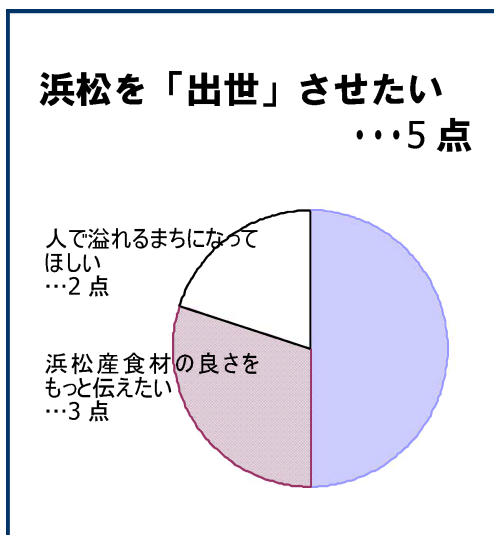


●300年前から長生きの秘訣だった浜松の「食」

静岡県は健康寿命が全国1位である。また、浜松は日照時間が多いことでも有名である。私は、この太陽の力が健康寿命のカギではないかと思っている。家康公も人生の最期に選んだのは静岡県であり、選んだ理由の一つに「米穀の味が他国に勝る」と言っていたとされている。また、およそ300年前の百科事典「餅鯉（モチカツオ）」についても記載されている「和漢三才図会」には「遠州（新井）の鯉（タタキ）の味を上とする」と賞賛されている。つまり300年前から既に浜松の「食」は評価されていたということになる。健康マニアの顔も持つ家康公は、この地の食材が健康に良いと知っていたのではないかと。

●家康公が浜松を「出世」させる

「出世大家家康くん」を始めとして、浜松＝家康公と注目されている今が、浜松を全国規模で盛り上げる非常に大きなチャンスである。まずは、ゆるキャラグランプリで家康くんを1位にしたい。そうなれば、全国が「なぜ浜松と家康公が関係があるのか」と疑問に思うことになるだろう。そこで我々が、浜松と家康公の関係、家康公も好んでいた浜松の食材といった風土を歴史と合わせて伝えることにより、「天下取りを育てたまち」「健康的でおいしい食材がそろうまち」であることを広くPRできる。人を呼び込むことができ、浜松自体が「出世」するための工程表である。



【浜松市への期待度グラフ】

●人で溢れるまちに

今年、ディズニーが30周年を記念したパレードを浜松で開催した際、私たちが実施している家康楽市の約10倍にあたる45万もの人が集まった。浜松のまちなかにあれだけの人を集客する力があることに驚いた。

しかし、パレード終了と同時に帰ってしまう人も多く、まちなかで食事をして行った人は3割程度と分析している。偶然にもディズニーが30年でこれだけの力を見せつけたように、浜松の30年後も人で溢れるまちなかとなるよう、今回の未来ビジョンに期待する。

あだち けんじ
安達 賢二さん

チンゲンサイ農家

●農業に適しているまち、浜松

会社員時代から家庭菜園の延長で農業をしていた。今は専業農家として青梗菜を育てているが、浜松は気候が温暖で、雪が降らないためビニールハウスを使った農業がやりやすい。また、今の農業は生産するだけでなく、営業、販売や人を雇って使う能力も求められる。意外かもしれないが、会社員時代よりも人づきあいは深く濃いものになっている。浜松に住む人たちの地元意識の強さや、人との繋がりを大切にする気質も農業に適していると言える。



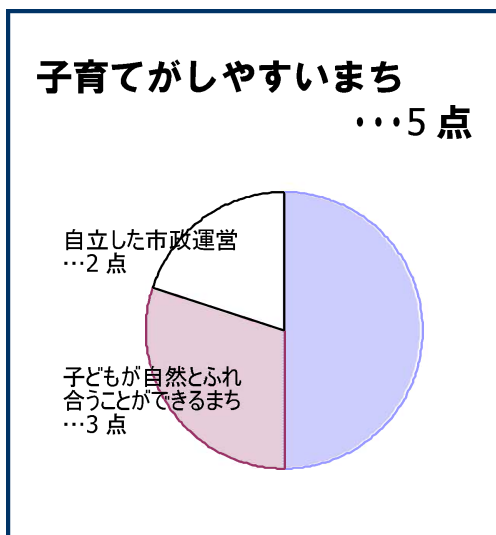
[安達賢二さん]
農業を続けたい人、規模を拡大したい人への効果的な支援により、浜松の農業はまだまだ発展すると語る。

●農業人口の低下を防ぐために

TPP の話題が出始めてから、新規就農希望者が減り、農業をやめていく人も多い。農業人口を増加させる方法は、担い手（後継者）を増やすこと、新規就農者を増やすこと、現状の農家がもっと面積を増やすこと、の3つである。行政は新規就農者を増やすことに施策、資源を集中的に注入しているように感じるが、3点のうちでもっとも困難な手法である。それよりも後継者を増やす方が現実的である。そのためには、生計を立てていける農業を次の世代に残していくことが必要であり、行政等の支援機関には、実は十分に用意されている営農支援のための補助金の周知と、農地を借りたい人と貸したい人の積極的なマッチングを期待したい。

●「浜松に住んでいて幸せだ」と大人が思える環境づくりを

浜松市の人口を減らさないため、親がわが子を浜松で育てたいかという視点で考えてもらいたい。まず、浜松に住んでいる大人が、食・仕事・医療が充実して子育てがしやすいと思えるまちにするべきである。しかし、最近の度重なる政権交代に影響される急激な制度の変化に市民が付き合わされている感が否めない。浜松はものづくりが盛んであり、税収もある程度は安定しているのだから、市民が安心して暮らせるために、国に振り回されることなく、自立した市政運営を期待する。



【浜松市への期待度グラフ】

●日本一を続けていきたい

浜松はチンゲンサイ生産量日本一である。今後も続けていくために、6次産業化、農商工連携などの次のステップを見越した展開も今の農業者には求められている。

行政には営農を続けたい人のため、農地を守る効果的な仕組みづくりを期待したい。

新たな道路整備や開発等、土地の形状に変化を加える際には行政は住民説明に来てくれるが、「土地の形状に変化を加えないための」住民説明があれば、農地を守る効果的な意見も出るのではないかと期待している。

あべ えみこ 阿部 ジョイ 恵美子さん

株式会社フォーシーズンズ外語学院 教学グループ勤務



【阿部ジョイ恵美子さん】
プライベートでも積極的に多文化交流
の場へ参加している。

●「多文化共生」推進のために

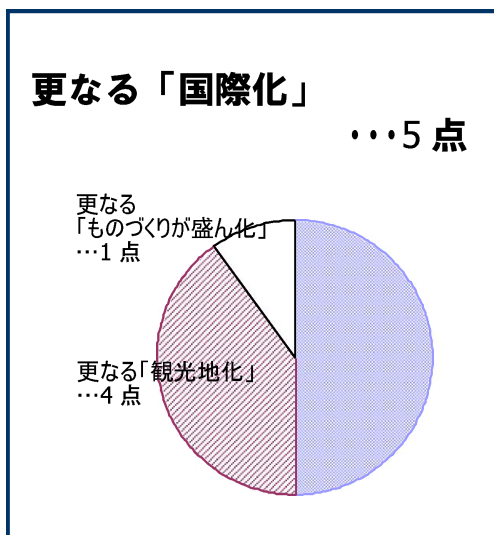
浜松市は国際交流が盛んで、他国の言語・文化について知る機会が身近にある。「多文化共生」（様々な文化を持つ人々と共に生きること）の社会を推進していくためには、言語だけでなく文化についての理解を持つことが非常に重要である。市役所や地域の団体が言語・文化の講座等を開催しているものの、それに対する人々の関心はまだまだ少ない。日本人・外国人を問わず、同じ浜松市民として、自発的に社会貢献のために行動していくことが多文化共生の実現を促していくと考える。浜松のものづくりを支えている貴重な外国人労働者のために、言語や文化に関する業務研修やワークショップを実施していくことが大事である。

●無料の駐車場・無料のシャトルバスでまちなかを活性化

浜松市はドーナツ化減少が起り、浜松駅周辺が寂しい印象になっている。まちなかが活性化するために若者が集まるような施策をしてほしい。例えば、室内娯楽施設やライブ会場の建設、「世界の料理展」のようなイベントを開催するなどして、人がまちなかに来たくするような環境を作る。無料駐輪場・駐車場、観光地への無料シャトルバスが整備も必要だと思う。

●企業の国際化に一役

浜松市は高度なものづくりが盛んである。グローバル企業の発展により浜松市の知名度がアップする。勤務先では、外国人が多い企業や外国への赴任者向けの言語・文化講座を実施している。受講者からは「なるほど！だから今まで外国人と意思疎通ができなかったんだ！」といった声を聞くこともある。



【浜松市への期待度グラフ】

●外国人市民がもっと近くに

行政サービスの中でも証明書の交付ができる自動交付機はすごく便利で、ほとんどの知り合いが市民カードを持っている。しかし、市政についての情報発信が弱いと思う。公的文書や広報物の翻訳、公的施設への通訳士の配備をもっと充実させてほしい。

また、スマートフォンで利用できるように SNS を活用して、若者が社会参加しやすい環境づくりをしてほしい。外国人とのディスカッションの記事や、外国人と日本人の考え方の違いを載せても面白い。今回のようなインタビューや意見交換会等があれば、市民と市役所がもっと近づけると思う。

あらき のぶゆき
荒木 信幸さん

静岡理工科大学学長

ふじのくに未来エネルギー推進会議会長

椎ノ木谷保全の会会長 等



【荒木信幸さん】
将来を考えると、高齢者の知識と経験が、
必ず役に立つ！

●まちに「にぎわい」を！

都市の中心部における「にぎわいの創生」への努力が不足している。同じ静岡県静岡市は人間のおいぐんぷんする。呉服町をはじめ、人の賑わいを感じる。浜松は産業のまちだからなのか、庶民的な飲み食いする場所など人が交流する場所が不足している。特に駅前、松菱の跡地利用、ザザシティの活性化などが遅れている。行政は、実現可能な将来像を描きながら積極的に関与すべきだ。

●若者が浜松市で働ける対策を

浜松市の有効求人倍率が全国平均からすると大幅に低い。なぜこのような事態になっているかつき詰めて、対応策をとらなければならない。若者が浜松市で働けないという事態に陥ってしまうことを恐れる。

浜松市はこれまで新しいユニークなものづくりで、世界でもトップクラスの産業を築いてきた。急速なグローバル化のために、生産拠点を外国に移している企業、あるいは移そうとしている企業が続出している。金融機関や行政は、企業が海外に進出することを指導・奨励しているように思える。むしろ、この地域に留まって活動する企業を優遇する政策や産業の競争力を強化する政策を実行すべきではないだろうか。若者が安心して働ける都市づくり政策を立案し、実行してほしい。このことは高齢化社会に向かっている時代であるがゆえに最も重要で、緊急を要する政策であると思っている。

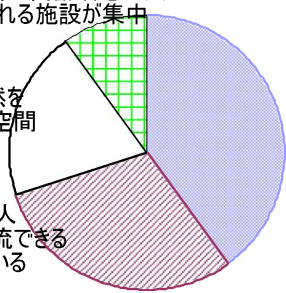
●効率の良いエネルギーの推進を

エネルギー資源の乏しい日本にあって、再生可能エネルギーの活用策、新エネルギーの開発などは極めて重要な政策となる。最近推進されているメガソーラーのような新エネルギーの普及も良いが、様々な再生可能エネルギーについても推進すべきだ。

企業が外国など他地域に流出することを防止し、若者が安心して働ける都市

…4点

- 都市の中心部に高齢者を元気にする活気あふれる施設が集中している …1点
- 都市部に自然を残し癒される空間を増やす …2点
- 居住地に人と人とが気軽に交流できる施設が整っている …3点



【浜松市への期待度グラフ】

例えば、太陽熱温水器は既存の再生可能エネルギー利用機器の中ではエネルギー変換効率や費用対効果が最も高いと言われている。身近な技術で、効率の良いものはたくさんあり、太陽光発電を導入するよりも安価な場合がある。

身近なエネルギーを普及させて市民の意識が高まれば、ますます省エネルギー化が進むのではないか。しかし、高度な技術を含むものを普及させることは、普及させる側に確かな知識がなければならない。もちろん、行政の役割は重要であるが、市民に正しい知識をわかりやすく伝えることは、いくつになっても私の使命だと思っている。

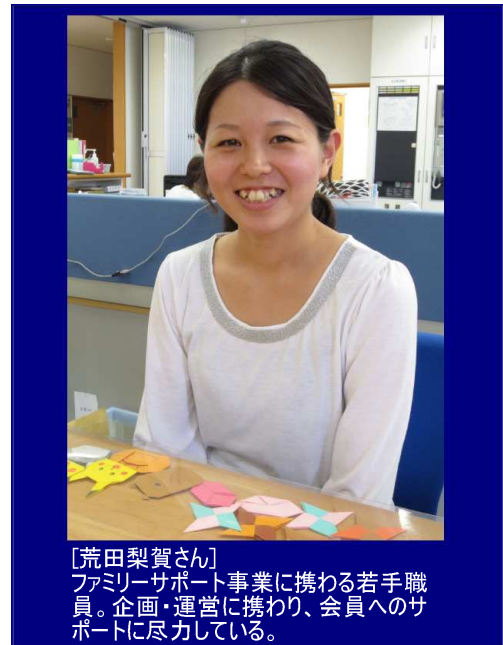
あらた りか
荒田 梨賀さん

浜松市ファミリー・サポート・センター職員

●子育て世帯に対するサポート役

浜松市ファミリー・サポート・センターが出来て10年。会員数、子育て世帯に対するサポート件数ともに年々増加をしている。

現在、当センターに約1,500世帯が登録しているが、まだ当事業を知らない方も多いため、必要としている方への周知と他人に子どもを預けることへの不安が少なくなる取組みをしていきたい。

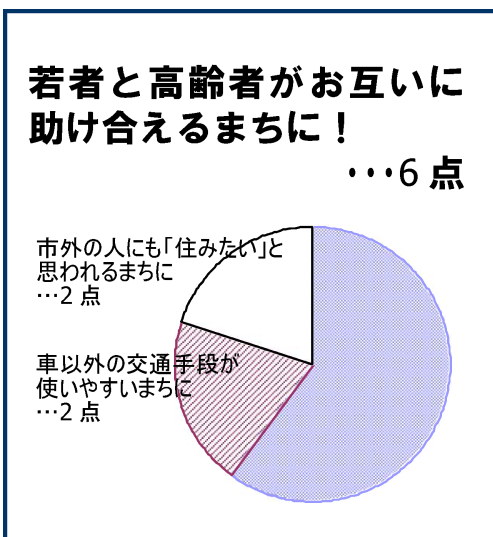


●強い郷土愛を持つ市民が多い！

浜松市に転居して約1年。実際住んでみると、浜松市民は郷土愛が強いと感じている。仕事で市民の皆様と接していても、住んでいる地域が話題になることが多く、浜松市は住みやすいと感じている人が多い印象を受ける。進学などで市外に出ても、最終的に浜松市に戻ってくる人が多いのではないかと思います。

しかしながら、自然溢れる浜名湖や、名産品のうなぎ等々アピールできる材料があるのに、浜松市と聞いてぱっと思い浮かぶイメージが少ないように感じる。例えば、ゴールデンウィークに盛り上がる浜松まつりが、市外から来た人や観光客がもっと参加しやすくなれば、浜松市をもっとPRできる材料になると感じる。

●若者と高齢者がお互いに助け合えるまち



【浜松市への期待度グラフ】

人口減少時代を迎える中、例えば、子育てサークルをつくるなど、自主的に地域に貢献する人が少なくなっている。地域の関係の希薄さは、業務の中でも感じる一方、きっかけや少し背中を押してあげれば、地域や世代間の「壁」を越えて、社会貢献したいと思う人も多いのではないかと。

超高齢社会を支えるのは、若い世代と元気な高齢者である。子育て政策や高齢者政策を分けるのではなく、違う世代が、お互いに助け合えるための橋渡しとなるような政策を求める。私もその一助ができればと考えている。

ありや としろう
有谷 敏朗さん

オークラクトシティホテル浜松
管理部管理課 課長

●人と人がつながるまち、浜松

浜松で生まれ育ち、ホテルの立ち上げからここで仕事をしている。この地は気候風土が素晴らしく、人とのつながりを大切にする市民性が特徴的である。サービス業は人と人とのつながりで成り立つ産業といっても過言ではなく、市民に愛されるホテルであり続けるためには、人とのつながりを大切にしていきたい。

●他には負けない「産業観光」が好評！

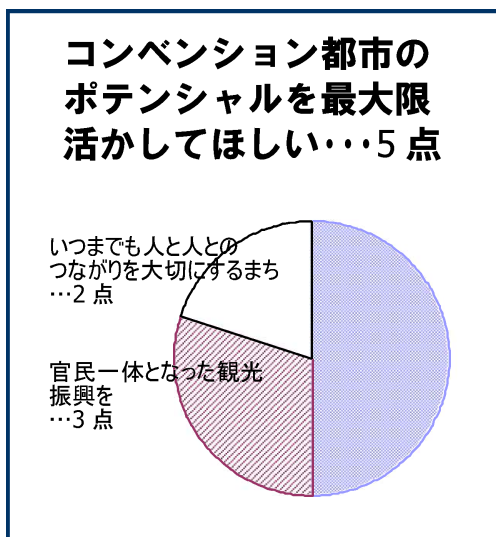
浜松は、使い勝手の良いコンベンション施設が駅と直結している。しかも新幹線も停車する。アクトシティのような、ホールと会議場が併設された施設が主要駅周辺に配置されているケースは珍しく、相当な強みであり、コンベンションの誘致はまだまだ可能である。また、コンベンション参加者には、浜松の誇るものづくり産業へのエクスカージョンとしての産業観光が好評である。一般的な観光では知名度のある観光地にかなわないかもしれないが、浜松の特性を活かし、地域が一体となれば、外から人を呼び込む方法はまだまだある。

●浜松駅に「のぞみ」を！

コンベンションの経済波及効果は大きく、まちなかの活性化にもつながっている。学会等のコンベンションは平日に開かれることが多いため、集客に苦慮しているまちなかの飲食店に大きな追い風になる。浜松駅に「のぞみ」が停車すれば浜松市でのコンベンション開催需要は更に伸びる。官民一体となり、「オール浜松」の体制で実現したい。



【有谷敏朗さん】
既存産業も活かしつつ、オール浜松で一体的に観光支援に取り組んでほしいと語る。



【浜松市への期待度グラフ】

●浜松の魅力をもっと高めるために

浜松は観光振興への支援を積極的に行うべきである。富士山・三保の松原が世界文化遺産に登録されたことで、静岡県への誘客はますます見込める。さらに浜名湖も世界遺産登録を目指すといった静岡県知事の発言もあり、県内全域の広域的な視点で観光振興に取り組んでほしい。

アクトタワーは来年 20 周年を迎える。浜松駅前のシンボルであり続けるため、人とのつながり、一体感を大切にしながら、浜松市民、市外からのお客様に非日常を提供し続けていきたい。

あわくら としたか
栗倉 敏貴さん

居宅介護支援事業所ジョアン（介護支援専門員、社会福祉士）



【栗倉敏貴さん】
東西文化の交差点で、多文化共生が進む浜松は、懐の広さがあり、浜松を訪れる多くの人々が、出迎えに好印象を持っている。これからも「ようこそ浜松へ」の気持ちを大切にしたい。

●介護・福祉分野で深刻な人材不足

介護、社会福祉分野の大きな課題は、この分野で働く人たちの仕事が、社会から十分な待遇を得られない状況にあることである。この現状が、若者の業界離れを誘発し、深刻な人材不足となり、特に過疎地では待ったなしの様相を呈している。

また、近年、財政難により社会保障全体が緊縮傾向にある中、生活保護費の不正受給などの一部の問題を全体の問題として捉え、給付適正化の名の下に、本来必要なものまで削減の対象としようとする動きがある。悪質な不正受給などのケースには当然対応する必要があるが、サービスを提供する側の都合ではなく、幅広い情報と見識に基づいた、本当の意味での「給付適正化」が議論されることを願う。

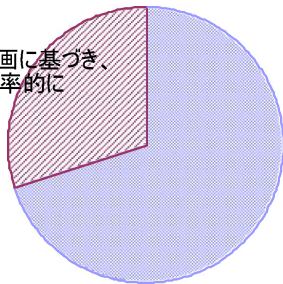
●多様な地域性に応じた柔軟な政策を

浜松市は、日本で2番目の市域を有し、都市部、農村部、山村部、漁村部と多様な地域性を持つ。これは、プラス面がある一方、統一的・画一的な政策では、「悪しき平等」を招き、狭い地域の課題解決には制約が生じてしまう場合がある。自治会や連合会単位など、区の単位よりももっと小さいコミュニティにおいて、生活課題に沿った柔軟な行政対応を望む。

また、交通環境に関して、浜松駅を中心とした放射状のバス路線が整備されているが、超高齢社会を迎え、充実した保健・医療・福祉の地域資源を活かすためにも、横断的な交通網の整備も必要になるのではないかと。

**子どもから高齢者まで、
一人ひとりの市民が人として
尊重されるまち ……7点**

確かな都市計画に基づき、
地域資源が効率的に
使われるまち
……3点



【浜松市への期待度グラフ】

●起こり得る現実を見据えて

現代人は、インターネットで簡易に情報が得られるため、自分の力で情報を調べ、分析し、理解する能力が弱まっている。市民一人ひとりが、30年後の自分の姿を予測しながら、自分、家族、友人など多くの人にとって住みよいまちづくりを自らのこととして考えていく必要がある。

その上で、行政は、楽観的な予測に立つのではなく、危機予測を含めた「起こり得る現実」を見据えて、30年後に必要な人材や設備が不足しないようにしなければならない。超高齢社会において、高齢者や障がい者など弱い立場の人々を支えていくことに耐えられる人材を増やし、自治体として浜松市が危機的状況に陥らない政策が求められている。

いいだ てつや
飯田 哲也さん

ユニー株式会社 プレ葉ウォーク浜北・アピタ浜北店支配人



●子どもたちにワクワクを届けたい

浜北に出店して 30 年が経つ。店舗の形態は変化しているが、お子さんやお孫さんを連れだしたりと何世代にもわたって来店いただいているお客様もあり、感謝を申し上げたい。私自身、浜松の出身であり、小さい頃は母に連れられて市街地のデパートへ出掛け、食事をする度にワクワクした。地域とともに歩んできた店舗として、今の子どもたちにも、私が体験したようなワクワクを届け、恩返しをしたい。

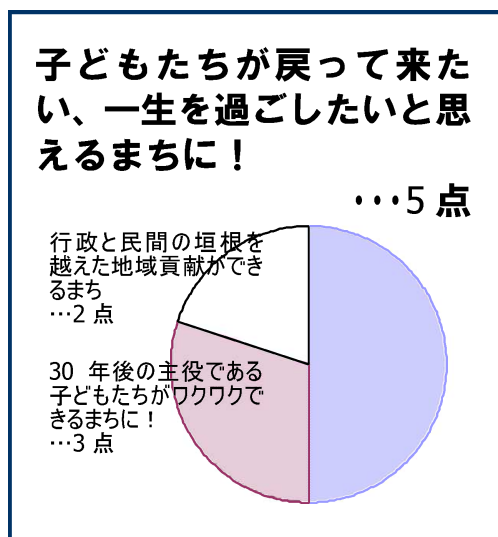
●戻って来たいまち、一生を過ごしたいまちに！

浜松は自然環境に恵まれている。また、産業も発展しているため雇用環境も整っており、住みやすいまちである。これからの人口減少、超高齢社会においては、「住みやすいまち」に必要な要素は、医療・福祉の充実なども求められる。

子どもたちが進学などで浜松を出ても、戻って来たいと思えるまちに、そして、一生を過ごしたいと思えるまちになってほしい。

●地域貢献、会社貢献、従業員貢献

企業の存在意義は、3 つある。まずは、地域貢献である。地域のために役立つことが最重点である。2 つ目として、利益を上げ、企業として存続するため、会社自身への貢献も必要である。さらに、3 つ目は、従業員がやりがいを持って仕事に臨める環境を整備する、従業員への貢献である。地域貢献の一環としては、行政との連携を進める余地はまだある。例えば、選挙の投票所としてショッピングセンターなどを使ってもらえれば、投票率のアップにお手伝いできるのではないか。



【浜松市への期待度グラフ】

●お客様へのサービスは進化し続ける

高齢の方が増え、お客様の行動範囲が狭まってくると、店舗に求められる形態も変化してくると考える。

我々も現在、ネットスーパーや電話宅配の事業を行っているが、よりきめ細かな宅配サービスを展開するためには、拠点の数が重要となる。そうした際、お客様の徒歩圏に点在するコンビニエンスストアのような店舗形態の重要性は更に高まるのではないかと。

また、小売業はお客様満足競争、自治体は住民満足競争の時代に、お客様に安定したサービスを提供するためには、店舗側も常に進化し続けることが必要であり、常に化する市民ニーズを的確に把握することは、サービス業と行政に共通して求められる要素である。

いけがい きょうこ
池貝 恭子さん

ヘルスボランティア大地

●ヘルスボランティア活動を通じて地域貢献

佐鳴台協働センターを拠点に、地域の高齢者に対し、健康を維持し、地域の交流を深めるため、体操や“脳トレ”など、一緒に学ぶ活動が続いている。ボランティア活動は、基本的に会場まで来られる高齢者を対象としているが、徒歩で会場まで来られない方や一人暮らしで引きこもりがちな方への支援が課題。運営側の高齢化も進む一方、参加者側が運営側になってくれる方もいるのはうれしい。

また、ボランティア活動の後継者が育っておらず、今後の活動の担い手が見つからないのも悩みのタネ。

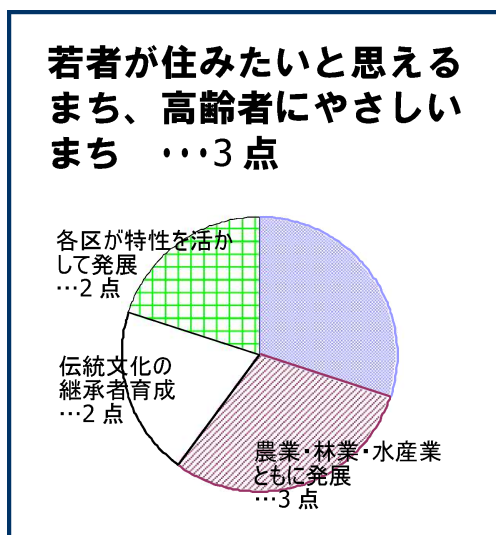


●住みやすい浜松市

温暖な気候に恵まれ、また適度に都会であるのに加え、浜名湖や天竜川、北区や天竜区などは自然が豊かで、住みやすいと感じている。うなぎをはじめとした数々の特産品や、オートバイ、楽器等世界に誇れる産業もあり、国際ピアノコンクールは“音楽のまち”を感じる良い取組みだと思う。

●若者の人口を増やす取り組みを！

30年後を見据えて、若者の働ける場をもっとつくり、進学等で県外に出ても浜松市にUターンできるよう支援をしてほしい。また、農業や林業にも積極的に携わることができるような環境整備が必要である。政令指定都市になって6年が経ち、今後、各区それぞれの特性を活かした発展を望む。



【浜松市への期待度グラフ】

●ボランティア仲間からの意見

- 若者に対する婚活を企画してほしい。
- 農地の活用、特に休耕地の利用で農業を工場化して作物をつくるような、大型農業を展開してほしい。
- 地元の木材を積極的に使ってもらおうようPRする。林業に関わる人への支援や、若い人へ技術の伝承が必要。
- 伝統文化を若い世代に伝承できるよう、学校現場などで体験学習を増やし、教育の中に取り入れてほしい。
- 個々を尊重しつつ、お互いを助けあえる地域作りと教育。
- 子育て支援を充実させてほしい。

いけや たかこ
池谷 貴子さん

NPO 法人ころころねっと浜松代表

●子育て支援の意識が高い西部地域

静岡県内で子育て支援の講座などを開催した場合、西部地域で人の集まりの良い傾向が見られる。西部地域は、子育て支援の意識が高い地域であるけれど、市民協働の考え方が浸透していないので、なかなか市民と行政が手をつなぎにくくなっている。そこには、コーディネートする人材が必要となる。さらに、次の活動を担う若い人を育てることが難しくなっていることも課題となっている。



[池谷貴子さん]
親子サロンのころころルームの運営や多胎児支援、出張託児などを展開。会員 29 名。京都市出身。

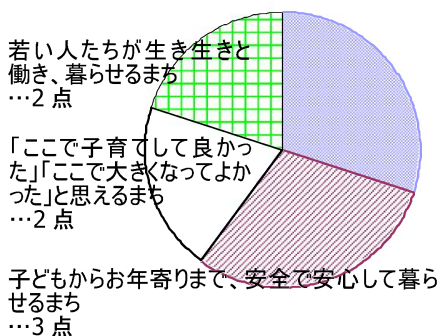
●「親の力」を育てる時代に

かつて、子どもが生まれ育っていくことは自然なことだった。しかし、今では、健全に成長させることが難しい時代になった。問題なのは「親の力」が決定的に不足していること。子育てを知らないまま親になった人たちが、子育てを通じて成長していく時に、手助けや助言できる年配者がそばにいないため、基本的な「育児の方法」「子どもとの関わり方」を学ぶことができなくなった。子どもについて知り、具体的な子育ての方法を身に付けるためには、親になる前の準備教育や親になった後の「教育プログラム」が不可欠となる。もちろん支援者も古い子育て観にとらわれず、常に新しい知識を学ぶことも忘れてはならない。

●まちづくりは人づくりから

行政や市民団体は、地域のマンパワーを活用し、将来を見据えた「人づくり」に時間とお金を掛けるべきだと思う。子どもや若者の活動を支援したり、市民が学べる場を増やしたり、市民とともに事業を行ったりすることで地域力を育てることができるのではないか。この地域力が将来のまちづくりで大きな力となる。さらに、浜松の地で生まれ、学び、就職し、家庭を築き、子どもを育て、まちづくりに参加するような、人づくりの地域循環も必要だと考える。

自然の中で市民が憩い、 子どもが育つまち…3点



【浜松市への期待度グラフ】

●子育てするなら浜松だねと言われたい

何かを犠牲にしないと子育てと仕事が両立できないのはおかしい。市には、子育てしながら働ける環境づくりに取り組んでもらいたい。保育所や学童保育を整備するだけでなく、働き方そのものを見直すことが必要だと考える。ヨーロッパ諸国を見習い、仕事から早く帰れて、長期休暇も取れるなど、日本全国の先駆けとなることで、子育てするなら浜松だねと言われたい。

今後は、講座受講者の自主的な育児サークルづくりもサポートしていけたらと考えている。

いしかわ あつし
石川 敦史さん

なかよし第2保育園 園長

●お互い「育ちあう」ことが重要

平成2年より、なかよし第2保育園に勤務し、事務、給食業務から保育の現場まで、様々な実務経験を重ね、園長になり現在に至る。

近年は、親の価値観が多種・多様化し、権利意識も以前より増しており、個々に合わせた対応が必要である。現場主義を大切にし、多種多様なニーズを汲み取りながら、子ども一人ひとりの育ちに合わせた保育、教育を目指している。

子どもが健やかに成長していく姿を見ることは、やはり何よりも嬉しい。親、子、保育園、そして地域がお互いに支えあい、協調し、育ちあうことが重要である。



●「やらまいか」精神を取り戻す

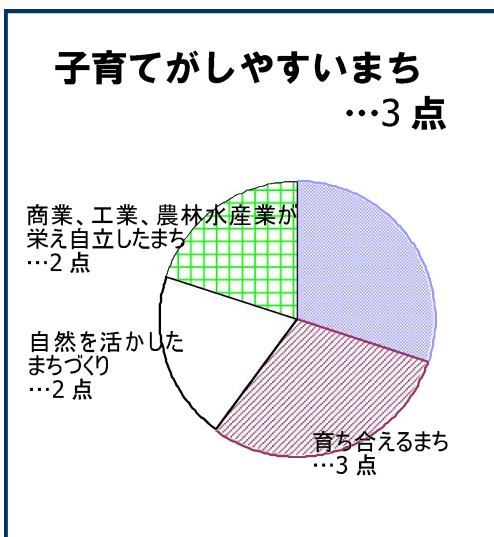
車、オートバイ、楽器、織物等、このまちに様々な産業が生まれ、大きく成長したのは、何事にも「やってやろうじゃないか！」という「やらまいか」精神があったからだと思うが、この精神が段々と薄れてきていると感じる。

最近では、すぐに結果を出さないといけない、失敗が許されない風潮があるが、浜松では、まずやってみて、失敗を重ねても、「やらまいか」精神で、それを活かして前向きに取り組み、様々なモノを生み出してきた。「やらまいか」精神を取り戻し、30年後も成長し続けるまちになって欲しい。

●子どもが健やかに育ち、育ちあえるまち

以前は、路地裏、小学校の校庭、公園、稲刈りが終わった田んぼ等で活発に遊んでいる子どもの姿をよく見かけた。しかし、最近では、外で遊ぶ姿があまりみられなくなってしまった。子ども同士で、育ちあえる機会がめっきり減ってしまったと思う。

また、電車やバス、スーパー等で赤ちゃんや子どもの泣き声が鬱陶しがられたという話もよく聞く。以前は、親だけではなく、地域で子どもを育てていたのに、子どもの居場所が様々な場所で少なくなってきている。行政も子育て支援に関する様々な施策を打ち出しているが、大切なのは市民一人ひとりが「浜松の子どもは私たちが育てる」という意識を持ち、地域にそういった雰囲気があふれること。子どもが健やかに育ち、育ちあえる環境づくりができることを望む。



【浜松市への期待度グラフ】

いしかわ かつみ
石川 勝美さん

柳川緑道街路樹愛護会

●人を中心としたまちづくりの発想を！

道路段差や公共交通機関の現状を見ると、依然として車中心、ハード整備中心の都市構造となっている感じがする。少子高齢化、環境問題など、今後の課題を見据えると、まちづくりの発想の原点を人に求めるべきではないか。

まずは、歩行者や自転車、セニアカー、ベビーカー等が移動しやすいように、段差の解消、自転車帯等の整備や、低床バスの拡充、トラムの設置など、様々な取り組みを進めるべきと考える。

また、無電柱化された美しいまち並みは、何世代にも引き継ぐべき市民共有の財産であるため、市民が沿線の清掃や植栽の管理を行うべきである。



【石川勝美さん】
きれいなまち並みは、市民との協働が不可欠と語る。

●層の厚い産業構造を！

浜松には、世界に冠たる企業が数多く、すばる望遠鏡には、浜松ホトニクス of 最新技術が採用され、日本のものづくりの最新技術を凝縮した新幹線の整備工場も立地している。

しかし、最近まで続いた円高や経済の低迷の影響などから、ひと頃に比べ浜松の産業の活力が落ちてきたと感じている。

ライバルである静岡市と比較し、浜松の経済を活性化するためには、強みであるものづくりを伸ばしつつも、第1次、第3次産業の充実を図るべきと考える。

ものづくり産業について、地元大学との連携強化をより進めるとともに、工業製品等の歴史的価値に着目した収集・展示を行い、観光面との相乗効果を図ってはどうか。

また、金融サービスや営業の本店・支店等の拠点を積極的に誘致すべきである。

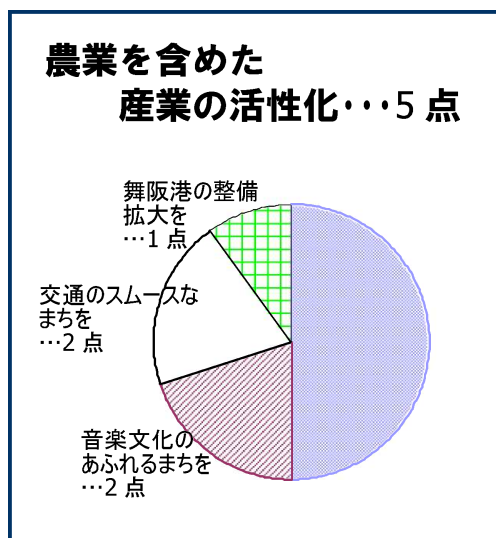
●浜松の人づくりの風土の活用を！

浜松は、徳川家康はもとより、水野忠邦など江戸幕府の中枢を担う人材が多数輩出し、明治維新後も本田宗一郎をはじめ、我が国の経済のリーダーたちが生まれ育ってきたまちである。

近年では、ピアノコンクールなど、世界の才能ある人材を発掘する役割を担っている。

こうした浜松の人づくりの風土を活かし、産業や文化様々な分野で、裾野を広げ、トップの誕生に結びつける取り組みを進めてほしい。

また、文化面で「酒井の太鼓」の歌舞伎、オペラの上演も企画してはどうか。



【浜松市への期待度グラフ】

いしの よしひろ
石野 好弘さん

NPO 法人ひずるしい鎮玉（しずたま）理事長



●市町村合併で豊かになったもの

市町村合併で何が変わったのか考えてみたい。自然では、遠州灘、浜名湖、天竜川、中山間地域などが広がり、伝統文化では、横尾歌舞伎や寺野・川名ひよんどり、懐山のおくないなどが増えた。産業分野では、ホンダ、スズキ、ヤマハ、浜松ホトニクスなどに代表される世界的な企業が更に集積したことも挙げられる。

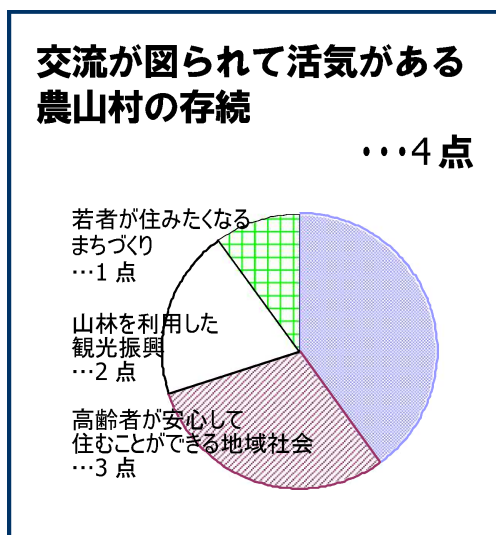
大きく分けて、自然、産業、伝統文化の分野で、都市のイメージが豊かになったと感じている。

●中山間地域があつてこそ

中山間地域があつてこそその浜松だと思う。人口が多い地域と違い、政策的にやっていかないと、立ち行かなくなってしまう恐れがあるのが中山間地域。地域の人口が減ったとしても、人と人とのつながりを充実させていけたら、きっと存続していけるのではないだろうか。NPOの活動を通じて、もっと地域の雇用を増やしていきたい。さらに、催しの参加者との交流を深めて、定住人口を増やし、魅力的で活力ある地域づくりを進めていけたらと考えている。

●守り育てたい地域の宝

ひずるしい鎮玉には、「まぶしい」「輝かしい」を意味する地域の方言「ひずるしい」と古くからの地域の名（鎮玉）を用いた。この地域には、貴重な宝として、県下有数のホテルの生息地など、豊かな自然が残る。会として田んぼや川を汚さず、荒らさないように守り育てていきたい。そのためにビオトープの建設等を進めることで、意識の高揚を図っていく。最近では、引佐北部中跡地にメガソーラーを設置した企業が地域協力を約束してくれた。会員や地域住民との連携を強化して、ホテルなどの地域の宝を活かし、ひずるしい地域づくりを進めていきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●インターから人を呼び込む地域に

浜松いなさインターチェンジができて、三遠南信自動車道や新東名高速道路へのアクセスが良くなった。三遠南信地域の市町村や静岡市へ行く際に、時間が短縮されて、とても近くに感じる。インターチェンジ近くには、未活用な土地があるため、アクセスの良さを活かして、物流の拠点としての活用にも期待している。

この鎮玉地域では、人と人とのつながりを大切にしながら、魅力ある地域にすることで、インターチェンジを通じて、他の地域から「人を呼び込む地域」を目指していきたい。

いしはら しんすけ
石原 慎介さん

有限会社石原や 代表取締役



【石原慎介さん】
地域のコミュニティ、交流の場として、昔ながらのスーパーであり続けたいと語る。

●国土縮図型都市が可能にした自社農園

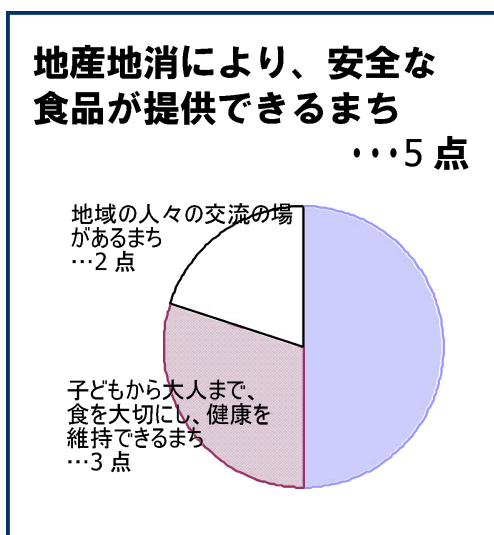
浜松は国土縮図型の政令指定都市であると言われる。都市部の他、山、川、海、湖があり、四季の変化もある。中山間地域と沿岸部では土質も大きく違い、栽培に適した野菜も異なる。この特性を利用して、市内の各所で自社農園を展開し、少量多品種の野菜の生産を始めた。お客様に安全で新鮮な野菜を届け、地産地消の素晴らしさ、浜松の野菜のおいしさを届けていきたい。

●市民の健康を食で守りたい

行政では、病気の予防を目的とした施策を推進している。これから先、高齢化が更に進展していけば、その重要性は増す。しかし、健康維持を考える上で、食が軽視されていないだろうか。人は食に支えられて生きている。若い頃の食生活の影響が出るのは数年、数十年先である。市民に安全な食を提供することは、将来的に医療費の削減につながると考える。病気や介護の予防のために事業を実施するのであれば、その目的達成のため、人々が地元の食材を入手しやすくすることも、効果的な健康維持事業である。

●食育の最大のチャンスは学校給食

核家族世帯、夫婦共働き世帯が世帯構成の中心となっている。この傾向は、食生活に大きな変化をもたらしている。家庭で手づくりの味を知る機会が減り、外食や出来合いの弁当などの食事が増えている。味覚は3歳で完成すると言われており、また、身体の成長段階でもある子どもたちへの影響は特に大きい。家庭環境の変化は時代の流れであり、すぐに変えられるものではないが、学校給食を食育の場に変えることは出来る。例えば、地産地消を強力に推進する学校には予算上のインセンティブを与え、軌道に乗ったら市内全域に拡大するなどして、将来を担う子どもたちに手づくりの良さを学ぶ機会を提供してほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●まごわやさしい

豆、ごま、わかめ、野菜、魚、しいたけ、芋の頭文字である。昔から、これを食べれば健康でいられると言われている食材である。と同時に、市販の弁当ではなかなか摂取できない食材である。大量物流により画一的で低価格な食品が重宝されているが、海の幸、山の幸の宝庫である地元浜松の食材を、消費者が入手しづらくなる原因にもなっている。今一度、地元食材の素晴らしさ、手づくりの良さを見直し、食の大切さを再認識する機会を仕事を通じて市民の皆様を提供していきたい。

いずた えつよし
伊豆田 悦義さん

静岡県弁護士会（浜松支部）



●「未来の担い手」子どもを大切に！

30年先は、自分たちではなく子どもたちが社会を担っている。30年後を見据えたまちづくりを考えるなら、子どもの目線に立った成長・発達への支援こそ最重要課題であろう。

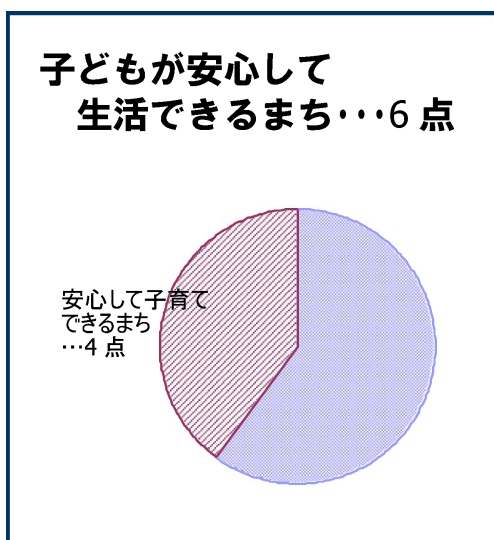
現在、体罰、いじめ、犯罪など、日常的に子どもが被害を受ける環境にある。大人にとって、都合の良い教育でなく、まずは、子どもの人格を尊重し、自尊心や自己肯定感を持てるような環境づくりを進めることが、私たち大人の責任である。

また、長引く不況から、子育て世代に余裕が無くなっている。親が幸せであって、はじめて愛情を注ぐことができる。そうした点に十分配慮しながら、子育ての理解と支援を、地域社会全体で取り組むような環境づくりをすべきだ。

●外国人とのより良い共生社会の実現を！

弁護士として、様々な法律問題を通じて外国人と関わる機会が増えてきた。日本人と外国人のコミュニティがそれぞれ個別に分かれていて、相互に溝や不信感が募り、トラブルに発展することがある。国際色豊かで外国人がたくさん暮らしていることは、浜松の強みであり、地域が新たな活力を得るチャンスでもある。まずは、地域が外国人を分け隔てなく受け入れ、相互理解と信頼感の醸成を図るべきである。特に、外国人児童を支える取り組みが十分でないと感じるので、行政には、外国人児童向けの教育環境に力を入れてほしい。

●バランスのとれた住みよい生活環境を！



【浜松市への期待度グラフ】

浜松市は、政令指定都市に相応しい規模の、施設等を持つとともに、豊かな自然環境や、温暖な気候に恵まれ、生活上必要なものは市内で完結し、非常にバランスのとれた、住みやすいまちである。

ただ、静岡市と比べると、中心市街地に魅力ある店舗が少なく、人気もない。また、道路事情なども車中心のつくりで、歩行者や自転車には不便である。少子化時代になって、今後の市の産業を牽引するような、優れたアイデアを抛出できる優秀な人材を浜松に引き付けるためには、教育や自然環境など、生活全般にバランスのとれた住みやすいまちづくりをより一層進める必要がある。地域全体で魅力あるまちづくりを進められたらと思う。

いずみ ひでみ
和泉 秀実さん

アングイア浜松株式会社(アグレミーナ浜松 運営会社)
代表取締役社長



●人が集まることで何かが生まれる

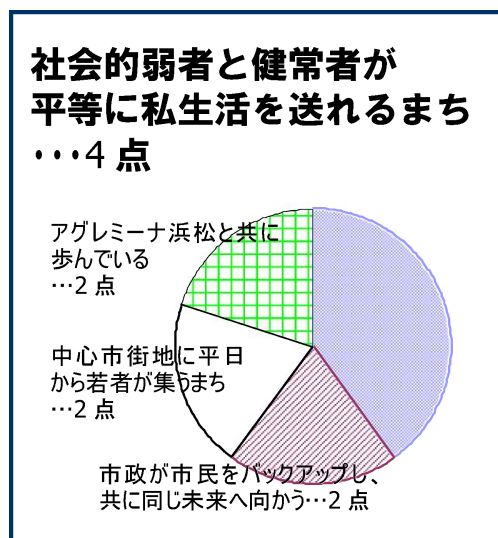
大型ショッピングセンターができ、一つの場所でも消化できる場所が中心市街地から郊外に移っている。松菱跡地にフットサル場ができるという話もあったが、ここにこそ人が集まるものができ、30年後には活気あるまちになってほしい。具体的に何がということは言えないが、人が集まることで何かが生まれ、そして、アグレミーナが、人が集まるきっかけの一つになることができればと考えている。

●市民主体の活動をバックアップ

市政と市民の意識や行動に違いがあるのではないか。市の事業のプロセスや効果を評価するには市民の目線が必要だと考えるし、参加することで市民も満足する。例えば、浜松まつりにディズニーパレードが来たときも、多くの市民はディズニーパレードを見るためだけにまちなかに集まり帰っていった。何のために実施するのかなどが十分に理解されていれば、商店街にお金が行くような仕組みも構築でき、更に良いものにできたと思う。市民が主体的に活動するため、行政による投資なりバックアップなりが必要なこともある。それは補助金だけでなく、活動場所の斡旋などでもよいと思う。

●アグレミーナを「浜松といえば・・・」の一つに！

浜松は、日本におけるフットサルリーグ発祥の地であり、フットサルの聖地と言われる。今年、F リーグの他のチームであまり観客数が伸びない中で、アグレミーナ浜松のホーム開幕戦には多くの来場者が訪れ、リーグからも浜松は条件の良い地域だと言われている。



【浜松市への期待度グラフ】

アグレミーナ浜松は、地域活性化集団として地域に貢献する活動を進めており、平成 25 年 6 月には NPO 法人を立ち上げた。訪問スクールや選手と触れ合える機会を増やし、子どもたちに夢と元気を与えていきたい。また、子どもたちの競技力向上に長期スパンで取り組み、最終的に日本代表を育てたい。

30 年後には、アグレミーナ浜松が今以上に市民チームとして存在していきたいし、「浜松」から連想されるものの一つになっていきたい。チームのエンブレムに市章を入れさせてもらったことに責任も感じている。今以上にチームの価値を上げていかなければならないと考えており、浜松市の発展にアグレミーナが貢献できるようにしたい。

いとう まさひこ
伊藤 昌彦さん

中野町煙火大会実行委員会会長
有限会社ステップイトウ

●歴史ある中野町の花火を守る

浜松市の花火大会は全国一の開催数。21年度のデータでは、181件にのぼる。中野町の花火は、六所神社の祭事として始まり、推定130年の歴史がある。天王町の花火に続いて、浜松市で2番目ではないかと言われている。

明治時代の頃、一度中断したら疫病が流行したことがあった。戦時中であっても、境内に氏子が集まって、線香花火で対応したと聞いている。地域にとっては、それだけ大切なお祭りである。その後、年々規模を拡大し、現在の打ち上げ数は4,000発。天竜川の堤防は、観客でギッシリになるほど有名な祭事になった。

地域イベントとして手を広げてきたが、明石の花火大会の事故以来、厳しい保安計画の作成が求められる。今後、自分たちの手に負えなくなる心配がある。

かつては、24歳になると祭りの親方を担うといった町の決まりがあった。その後、地元消防団が祭りを引き継ぎ、規模を拡大してきた。まずは、祭りを盛り上げ、若い人たちの参加を求め、花火大会の歴史を継承していきたい。

●地域の電器屋さんの将来

世の中は、セルフ対応が主流になってきた。ガソリンもセルフになっているし、お酒の配達もなくなっている。電化製品も大型量販店で買ってきて、自分で取り付けるのが一般的な考え方。大型量販店の強みは、在庫があること。安くて早い製品の提供が求められている。また、エアコンなど、インターネットで購入し、取付け工事のみの依頼も増えている。これからの考え方なのかもしれない。地域の電器屋は軒並み減ってきた。ただ、ライバルが減ったおかげで、

下げ止まりの感。現在も電気関係の売り上げ2割は、地域の電器屋が担っており、これからも残っていくのではないかと。

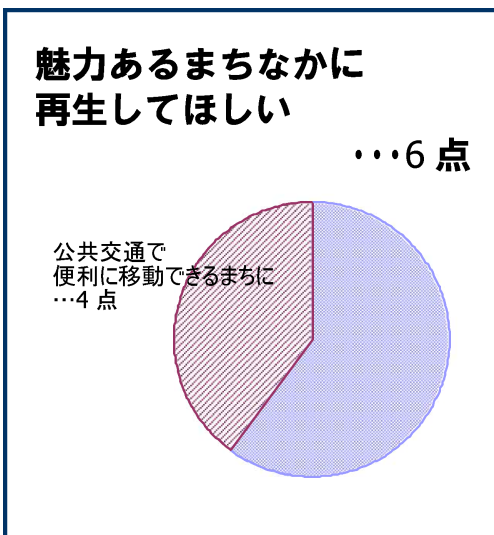
また、中山間地域では、電器屋がなくなってしまい、住民が困っているといった事例もある。ある地域では競合する電器屋がなく、景気が良いとも。

●30年後の世の中に向けて

新興住宅地は、人口が増えているが、一挙に年を取ると言われている。中野町や笠井町などの昔からのまちの人口は増える見込みはなく、中山間地域は減少傾向にある。決して道路などのインフラ整備ばかりが必要な訳ではない。こうした将来をしっかりと見据えて、必要な施策を行ってほしい。



【伊藤昌彦さん】
中野町商店会が解散する中でも、地域に根づく電器屋さんとして頼りにされている。



【浜松市への期待度グラフ】

いとう もとひさ
伊藤 基久さん

浜北手をつなぐ育成会 会長（知的障害者相談員）

●親が子の障がいを受容できる手助けを

当会は、知的障がいの子をもつ親の会で、法や制度の勉強会や家族間のつながりを深める研修旅行などを行っている。障がいのある子を持つ親は、子が生まれて、不安と葛藤がある中で子育てが始まる。親が子の障がいを受容できるかが大切で、その手助けができればと思っている。

会員数は現在約 250 世帯。浜北区は全世帯が賛助会員で、昔から地域の理解がある。今後も障がい者の自立と雇用推進、ノーマライゼーション理念の啓発など、積極的に取り組んでいく。



●未来に向けて「やらまいか」気質を発揮

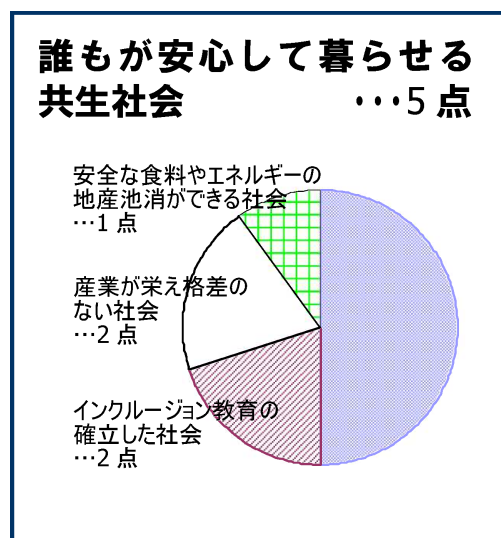
山間地域から、田畑、都市部、海岸地域まで多様な自然環境と文化を有し、日本の縮図的な地域である浜松市。その地域性をまだ活かせていないと感じるが、未来に向けて、先駆的な社会構造を構築できる可能性を秘めているのではないか。

また、医療、福祉施設が多いものの、それぞれの機関のネットワーク化は始まったばかり。今後は、医療分野の充実を売りにしてもいい。

中心市街地の衰退や、産業の空洞化が進む中、行政は、市民と一体となって「やらまいか」気質を発揮し、未来へ向けて積極的なビジョンを示さなければならない。

●誰もが安心、安全に暮らせる社会に

障がいに対する差別や偏見をなくすためには、子どものころから、障がいの有無に関わらず、ともに学ぶ開かれた包括的な教育、インクルージョン教育の推進が必要である。



【浜松市への期待度グラフ】

超高齢化、核家族化が進んでいることを実感しているが、障がい者も高齢者も大切なのは「生きがい」であり、自然豊かな中山間地域の活用など地域の特色を活かした取組も重要だろう。

また、様々な医療及び福祉分野等の施設や事業所のネットワークの構築や立場が弱い人たちへセーフティネットの確立を施策で実施していくべきではないか。

そして 30 年後に向けて、障がいがあっても、高齢者でも、子どもでも、誰もが安心、安全に暮らせる共生社会の確立を望む。

いまだ かずひこ
今田 和彦さん

公益社団法人浜松市シルバー人材センター理事

●「シニアの生きがいづくり」がテーマ

定年退職後、超高齢社会に視点を置き、一貫して「シニアの生きがいづくり」をテーマにボランティア活動などを行ってきた。シルバー人材センターでは、臨時職員として会報誌の編集に携わったのをきっかけに、理事を務めて4年。会報誌の編集は現在も続けている。草刈、庭木の剪定、家事援助、駐車場管理など当センターが依頼される業務は多岐に渡り、現在約4,000名の会員がいるが、それらに対応する知識、経験を持った多様な人材が求められている。



【今田和彦さん】

定年退職した仲間たちと、中高年の出会いと交流を目的に、「アクティブシニアネット」を設立。高齢者が地域社会に出て、健康で生きがいのある生活を送るお手伝いができればと願う。

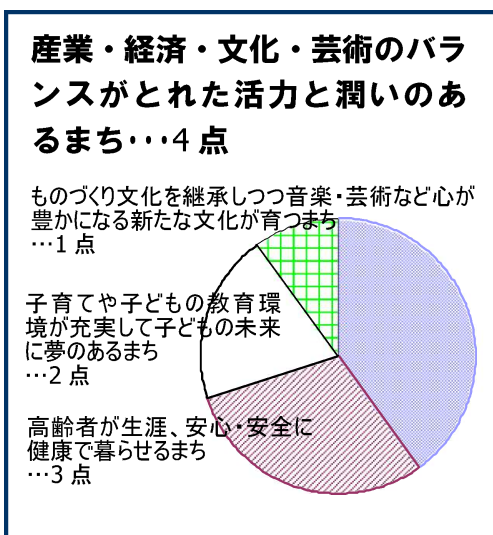
●超高齢社会に対応した発想の転換を

浜松市は、首都圏と関西圏のほぼ中間にあり、新幹線、新旧の東名高速道路など広域交通インフラにも恵まれ、浜名湖、天竜川、北遠の森林など自然環境も豊か。自然災害も比較的少なく、気候も温暖で住みやすいまちとして定評がある。

ただ、北遠地域では、過疎化と高齢化が極めて進んでいる現実がある。交通環境を整え、中心市街地と北遠地域の交流人口を増やし、中高年の趣味や生涯学習の場、子どもの野外学習の場として芸術村の創設や長期滞在型の学習村などに活用を図るのも一案である。

また私を含め、すべての市民が、中心市街地の衰退を危惧している。「中心市街地の活性化には商業施設を」という固定観念は改め、超高齢社会に対応したコンパクトなまちづくりを目指すなど、発想の転換が必要ではないか。

一方、「楽器のまち」から「音楽のまち」を目指して久しいが、浜松市民の日常生活の中で、文化として「音楽のまち」が育つには、まだまだ歴史的な時間が必要だと思う。様々な取り組みを継続することで、「文化・芸術」を高めて、「ものづくり」と「文化・芸術」のバランスのとれたまちづくりを目指したい。



【浜松市への期待度グラフ】

●高齢者同士で自立する仕組みが必要

超高齢社会を迎え、高齢者は、従来の「若者に頼る」という発想ではなく、全く新しい人生のスタートととらえ、元気な高齢者がそうではない高齢者を地域ごとに支える仕組み、姿勢が必要である。それには普段から隣人同士の交流、コミュニケーションを図っておくことが重要だ。行政だけを頼るのには限界がある。

また、将来を担うのは子どもたちである。子育て世代をしっかり支援して、次世代の子どもたちに浜松の将来を託したい。

い やなぎ まこと
井柳 誠さん

NPO 法人水辺の里まちづくりの会
天竜川・県排をきれいにする会

●産業構造の変化に強い産業を

浜松市は世界的な企業を中心に、「ものづくり」を発展させてきた。世界に誇れる技術で、浜松市特有の「ものづくり」を生み出した頭脳は依然として強みである。しかし、今後、浜松市の産業が特定の工業製品に特化していることが欠点になるのではないかと。それは、国内外における産業構造の変化に対応しきれなくなる可能性があるからだ。現在、国外に生産の拠点を移す企業が多いが、これまで新しい技術を生みだしてきたことを強みにし、浜松市の得意分野を伸ばすとともに、他の産業も幅広く発展させることができれば、安定した社会が築けるのではないだろうか。



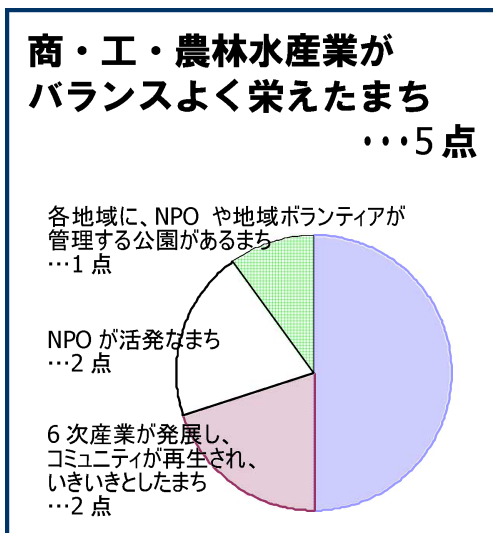
【井柳誠さん】
河川環境保全と言えば、上流部と思われがち。河口部にも関心を持ってほしいと語る。

●エコミュージアム構想

浜松市には多くの芸術、文化、伝統、自然、特産物などがある。しかし、全国的に見れば、それらの認知度は低い。また、浜松市の様々な文化施設や観光地は、市外から訪れた方にとっては、何を見れば良いのか、次はどこに行けば良いのかわからない。こうした弱点を強みに変えるために、浜松市全体をエコミュージアムとしてまちづくりを考えてどうだろうか。そのためには、広い視野を持つことが必要である。来訪者の導線を確認するための交通体系の見直し、特産物が販売される道の駅のような施設の設置など、浜松市の文化や自然などを広めるためにも、大胆な政策が必要だと思う。

●6次産業の活性化を

今後ますます増えると予想される遊休農地を有効利用するべきである。そこで、6次産業を普及させてはどうだろうか。特定の事業者では行われているようだが、農地を持っている人や地元のNPOなどが地域の取り組みとして6次産業を実施し、それを根付かせていきたい。その



【浜松市への期待度グラフ】

ためには、加工しやすいような農作物を新たに栽培する必要があるかもしれない。行政、民間、大学等の研究機関と連携して、6次産業を見据えた新しい農産物の開発が必要になると思う。行政が介入し法人化して、6次産業を推進することもできると思うが、地元の土地を地元の人が有効に使うことが重要である。また、新しい産業ができれば、そこに雇用も生まれる。農業ならば高齢者にもできることが多いと思う。そうした中で地域の取り組みが評価され、他の地域へ活動が広がっていけば、地域のコミュニティの再生も進むと思う。

いわい まゆこ
岩井 万祐子さん

株式会社ホト・アグリ代表取締役



【岩井万祐子さん】
子育て中の母親の社会進出促進のため、
官民一体となり子育てを応援する環境整備
が必要と語る。

●元気な企業と若者が盛り上げるまち・浜松

浜松には、光技術、楽器、輸送用機器など、世界トップクラスの技術を持った企業がある。それらの産業を支える中小企業も、切削、プレス、鋳造、鍛造などの各分野で非常に優れた技術を持つ企業が数多く存在する。さらに、地域の大学・短大の学生は純粋で若者らしい発想で、縁の下の力持ちとなっており、地域産業を盛り上げる構造が出来上がっている。また、「浜松まつり」を中心に若者が結束し、地域を元気づけている。この企業群と若者の元気が浜松の特色であり、パワーの源である。

●子育てママに働く場所を！ 子育てしやすい環境を！

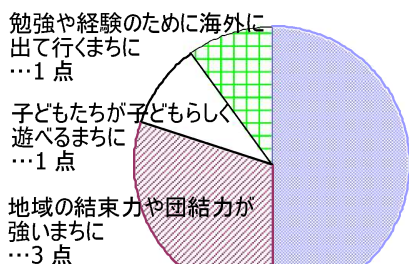
会社では、紫外線を使って害虫を駆除しながら、無農薬野菜を栽培している。農作業は休みがなく朝から晩まで働き詰めで、作業自体も過酷というイメージもあると思う。しかし、会社で働く女性は全員子育て中である。作業時間を平日の昼間に限定し、仕事と子育てが両立できるようにしている。また、作業環境もできるだけ工夫し、育児で疲れた体に極力負担をかけないような配慮をしているつもりである。私自身も子育ての真っ最中であり、仕事をしたい子育てママが働きやすく、子育てをしやすい環境を整えることができれば、浜松はもっと住みやすいまちになる。

●若者が中心となり、活躍できるまち

未来の浜松を引っ張る若者が中心となり、これまで先人たちが築き上げてきた浜松の文化と伝統を守りつつ、時代の流れを察知し、必要なものやことを取り入れることができる環境を整えていくことが、30年後を見据えたまちづくりに必要である。

高齢者が移動などに 困らないまちに

…5点



【浜松市への期待度グラフ】

●忙しいお母さんはアイデアの宝庫

子育て中の女性が働ける場所が増えると良い。特に農業分野では、我が子に安心・安全なものを食べさせたいと日ごろから意識している母親の視点が、作物栽培に役立つ。

また、家庭との両立を考えると、働くことができる時間も限られているため、作業効率を常に意識することになる。その結果、効率性を追求した仕事の進め方のアイデアが生まれてくるはずである。

私自身、母として、会社経営者として、必要な勉強を続け、地域の、社会の、子育てママの役に立つ存在となっていきたい。

うちやま ひろゆき
内山 博之さん

八幡通り街路樹愛護会 会長

●花とみどりのまちづくりを！

浜松市には、フラワーパーク・フルーツパーク・ガーデンパークなど大きな公園がある。平成 26 年春には、「浜名湖花博 2014」が開催されることから、多くの集客が見込まれ、公園の価値が一層高まることが期待される。

街路樹愛護会では、活動を通じて、地域とのつながり、人々の交流の輪が広がっている。今後、会員の増員も含め、花とみどりのまちづくりを活発化していきたい。



【内山博之さん】
製本屋を営みながら、八幡町公会堂の管理人も務めている。

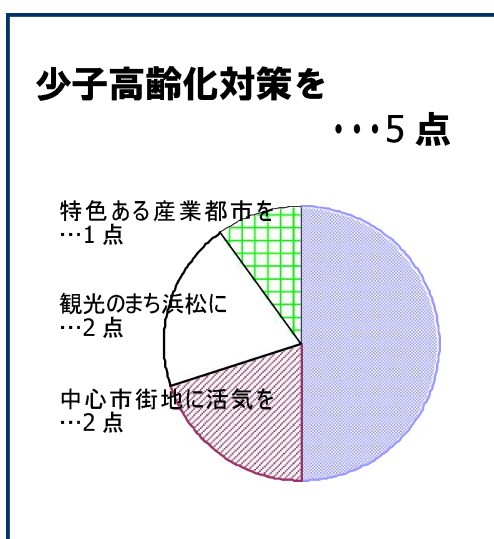
●中心市街地の活性化を！

中心市街地の一等地にぽっかり穴が空いている。ここ 20 年で百貨店が次々と姿を消し、大型の商業施設が郊外に出店するようになって、人や金の流れが変わってしまった。幼少期、学校から帰ってくると、デパートへよく遊びに行っていたことを思い出すと、残念な気持ちになる。

中心市街地に、もっと活気や人の流れがあるまちづくりを進めてほしい。

●道路を活かした特色ある産業づくりを！

新東名高速道路が開通したことにより、交通の便が格段に良くなった。浜松を横断する環状線や、将来飯田まで繋がる三遠南信自動車道など、浜松にはすばらしい道がいっぱいある。立地条件もよく、津波の心配もない、都田のテクノポリスなどの内陸部に企業を誘致することによって、雇用が促進され、30 年後は発展していることと期待している。



【浜松市への期待度グラフ】

●子どもと一緒に通勤できる職場を！

昔は、自分の親に子どもの面倒を見てもらって、仕事をしていた。今は、共働きが増えており、親と同居していないことから、子どもを預けなければならないが、預ける施設が遠かったり、空きがなかったり、保育施設が不足しているのではと感じる。

病院によっては、事業所内保育を実施していると聞く。子どもと一緒に通勤できるような職場が増えることを期待している。

私自身今は元気だが、いずれは、老人福祉施設等を利用することになると思う。市内にある施設は、利用料等が高額と聞いており、今後に不安を感じている。

うら
浦 かおりさん

スズキ株式会社 経営企画室

●セニアカーの可能性

アメリカのディズニーランドに行った。すると、セニアカーに乗りながらアトラクションを楽しむ人の姿を多く見かけた。各所で専用スペースがあり、段差も解消されている。バスの運転手やアトラクションの担当者も手馴れた様子で受け止めている。来場客の理解もある。

日本におけるセニアカーの普及はまだまだ。セニアカーでの外出に抵抗感があるようだ。メーカーとしては、不便を解消する機能性や乗ってみたいと思わせるデザイン性を高めていくことが必要。一方、行政には、安全に移動できるハード面の整備や周囲から理解される環境づくりを進めてほしい。

高齢になって、歩行が難しくなると、一人で出かけることに不安を感じ、家に引きこもりがちになってしまう。自由に外に出て、自然に触れて、人に出会って、刺激を受けながら楽しく過ごしたいはずである。そんな思いを手助けするのがセニアカー。お年寄りの不便や抵抗をなくし、生き生きと暮らせるまちをつくりたい。

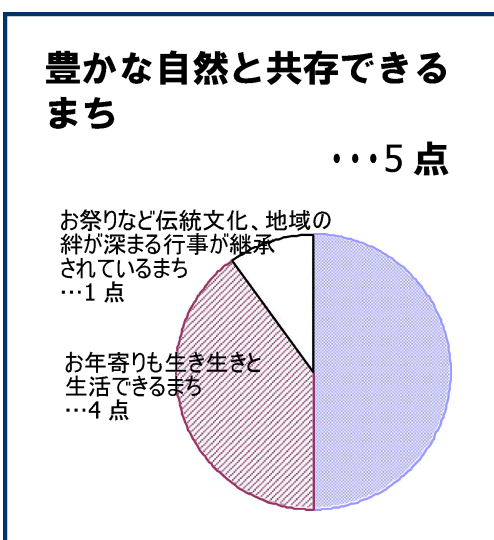
●日本と海外の自動車の売れ行き

インドでは、セダンが売れ、インドネシアでは MPV や SUV が売れる。新興国では、初回購入者が多く、購入者の平均年齢も若い。日本の車の保有台数は飽和状態で、今は、乗り換えのお客様をターゲットにしている。ただ、車の購入意欲が高い若い女性層で、他社との競合が激しい。この点に関しては、宣伝効果などイメージ戦略に改善が必要と考えている。

電気自動車など次世代のクルマに関しては研究を進めているが、まずは、一般車の燃費を良くすることに力を入れている。燃費の改善は、まだまだ追求の余地があると思う。



[浦かおりさん]
いつも笑顔で職場を明るい雰囲気にするムードメーカー。最近は大形二輪免許を取得。オートバイは男だけの乗り物じゃない！



【浜松市への期待度グラフ】

●外から浜松を眺めると

浜松といえばマリンスポーツ。名古屋や福井などから何時間もかけて浜松に来る人もいるのに、20分あれば、海に行ける。浜松に来て2年になるが、この点は恵まれている。それから BBQ。浜松の夏は、川べりで毎週のように楽しんでいる。

30年後も、自分の子どもや孫たちが、自然の偉大さを感じつつ、海で、川で遊ぶことができるまちになってほしい。アカウミガメが産卵する海岸があることは何よりも誇り。

それから、地域の伝統行事を見ると、地元への愛着のある市民が多いまちと感じる。私もその一員になれば…と感じる。

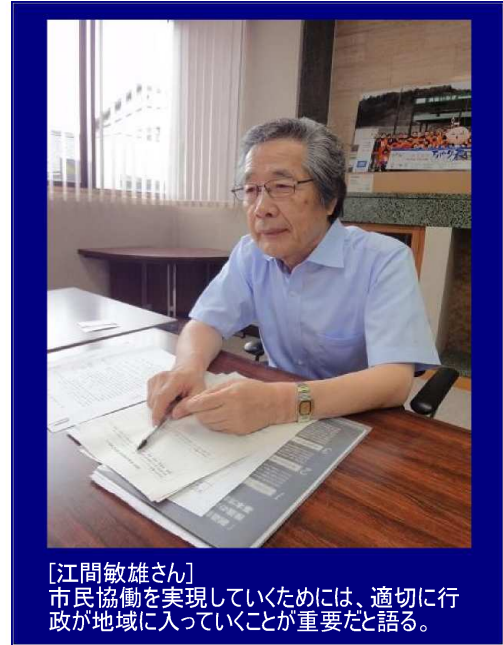
え ま と し お
江間 敏雄さん

細江まちづくり協議会 会長

●地域の声が活きるまちに

細江まちづくり協議会の活動を通して、まちの発展に尽力をしていきたい。先日、細江公園美化再生プロジェクトとして、2日間、展望台の洗浄、遊具のペンキ塗り、公園内の芝刈などを中学生と理事で実施した。細江公園には、天皇陛下の歌碑などが設置されている。周辺の地域が力を合わせて、総合的な観光資源を開発していければと思う。

行政にもリーダーシップを発揮して、地域の発展に力を貸していただきたい。そのためには、もっと行政の人間が地域の中に入ってきて、現場を見て、感じてほしい。現在は、「市民協働で築く未来にかがやく創造都市浜松」の具体的な姿は見えていないが、地域と行政の関係性を確立していきたい。



[江間敏雄さん]
市民協働を実現していくためには、適切に行政が地域に入っていくことが重要だと語る。

●魅力のあるまちづくりが必要

観光面の魅力発信が弱いと感じている。浜松には浜松城も浜名湖もあり、観光資源はある。浜松城をシンボルとした中心市街地のまちづくりや、奥浜名湖の景観を活かしたまちづくりには、開発の可能性が多く眠っている。若いアイデアも取り入れつつ、まちづくりの設計をしていってほしい。また、国の特区制度を利用して、農業、林業、商業、産業、観光業において特色を活かす、特徴的なまちづくりができればよいと考える。子育て支援を充実させるための子ども特区も考えられる。

●安全で安心して暮らしのできるまちに

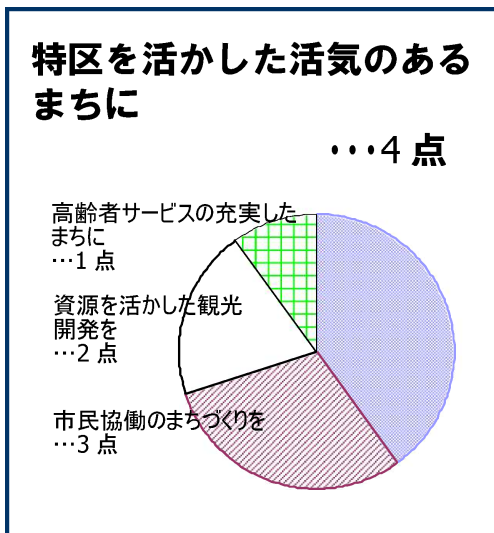
高齢社会になれば、行政の力だけで地域住民の暮らしを支えていくことは限界がある。地域住民が交流する場を増やし、助け合って暮らしていく必要性が高まると考えている。しかし、

将来的に企業の退職年齢は70歳になると予想しているが、定年するまでは地域活動に従事することは難しいだろう。そうなれば、ボランティアや市民活動団体は人材難を迎えてしまう。高齢者サービスの有償化なども含め、検討すべき課題は多い。

●NPO 法人としてまちづくりを！

地域の力を現状よりも発揮していくために、NPO法人の設立を計画している。

設立のためには、拠点の確保や資金の確保などの苦労も多いが、今までのまちづくり協議会ではできなかった事業の実施や、行政と積極的に関わるためにも、なんとか実現させたいと考えている。



【浜松市への期待度グラフ】

お お た ま さ た か
太田 昌孝さん

有限会社カネタ太田園代表取締役

●浜松は農業のまちでもある！

浜松市はものづくりのまちとして全国的にも有名であるが、農業のまちでもあることをもっと知ってほしい。天竜の山はお茶づくりに適しており、品質の良いお茶ができる。私が農林水産大臣賞を受賞してからは、全国から視察が来る。先日はフランスからワインづくりの専門家が視察に来て、葡萄づくりとお茶づくりは共通点が多く、意気投合した。地域や国籍に関わらず、同じ思いで農業をしている人と会話するのは本当に楽しい。農業に恵まれた環境があり、市町村合併により都市の規模が大きくなったのだから、行政が販路開拓に本腰を入れれば、浜松の農業はまだまだ伸びる。



●子どもは日本の宝。地域を挙げて守る！！

未来を担う子どもは日本の宝である。地域をあげて守る必要がある。小中学校は学区が設定されており、選択の余地がない。規模の適正化も理解できるが、安全面、環境面に最大限配慮した学校であってほしい。

●7分7日7週間

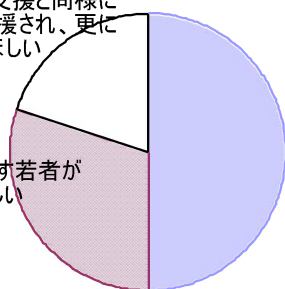
7分7日7週間という言葉をご存知だろうか。人間は酸素が7分欠乏すると生存できないとされており、水は7日、食糧は7週間口にしないと生存できない。酸素も水も食糧も中山間地域で生産されており、都市部の人には酸素と水はタダだと考えているようだ。中山間地域で生活しているからという訳ではないが、都市部の人には中山間地域に借りがあるという意識を持つことも大切である。その中山間地域の活性化のためには、若い就農者が増えることと、美しい自然を守ることが大切である。農地を増やすとは言わないまでも、減らさない取り組みと、環境が悪化するまで放置するのではなく、美しいうちに保全する取り組みが重要である。

未来の宝である子どもの 安全を最優先に！

…5点

工業への支援と同様に
農業も支援され、更に
成長してほしい
…2点

農業を志す若者が
増えてほしい
…3点



【浜松市への期待度グラフ】

●行政と市民の距離を縮めたい

行政が市民に事業の説明を行う際には、相談ではなく、決定事項の報告がメインになっている。これでは市民は意見を言っても仕方がないと考え、役所と市民の距離感は広がってしまう。道路修繕の要望なども、市民一人ひとりの要望を確認してはキリがないのは理解できるので、自治会を通じての要望などはできるだけ速やかに対応してほしい。市民としても不要な要望をしているつもりはなく、生活に密着しているからこそその要望である。このようなやりとりを経て、役所と市民の距離も縮まっていくのではないかと。

おおひらのぶこ
大平 展子さん

NPO 法人夢未来くま副理事長・事務局長

●過去との絆、未来への絆

東日本大震災以降、絆という言葉が脚光を浴びている。

この地域には、それ以前から、絆が備わっている。今を生きる人たちの横のつながりだけでなく、昔からこの地域で生活をしてきた人たちから、技術、文化、生活様式などに加え、何よりも「この地域が好き」という思いの結晶である絆を受け継いでこの地域は成り立っている。未来へ向けて、この絆と、人々を常に見守ってくれる豊かな自然を受け渡していくことが、私たちの使命である。

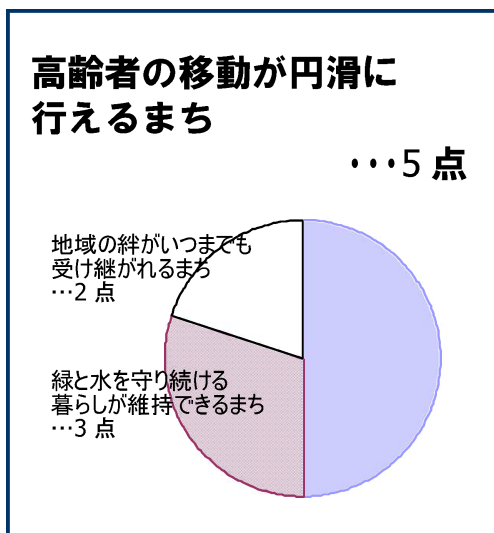


●定住人口を増やすには、人が住み続けていることが大事

天竜区熊の地域には、60年前は約2,500人が生活していた。30年前には半分の1,300人程度になり、現在の人口はその半分程度である。このままでは、30年後にこの地域に住む人は、300人程度になってしまうのではないかと考える。近年、田舎暮らしが注目を浴び、Iターンで移住してくる方もいる。しかし、職場、医療機関、学校がなくては、希望はあっても生活に不安があり、移住に踏み切れない人もいる。人がいなくなってしまった地域には、人を呼び戻すことはできない。地場産業を育成し、医療、学校についても廃止の前に存続のための工夫を凝らし、今の暮らしを維持することが大切である。

●健全な家庭が増えていく地域づくりを！

少子化、晩婚化などが全国的な問題となっている。最近では婚外子の相続格差を巡る裁判も話題となっており、家族について改めて考える時期が来ている。人口を維持するためには、1世帯に3人の子どもが必要と言われているが、家族が健全に暮らしていくためにも、そのくらいの子どもの数がちょうど良いのではないかと考える。将来の浜松を担う子育て世代や子どもたちが安心して暮らせるために、官民一体となった地域づくりが求められている。



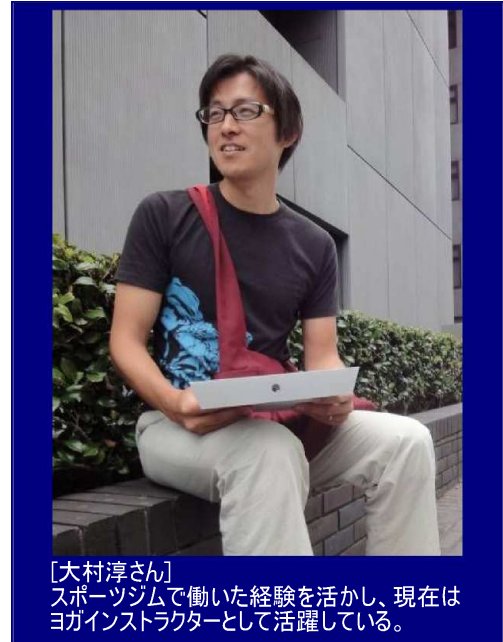
【浜松市への期待度グラフ】

●現場を見た政策立案を

浜松市は全国で2番目の広大な面積を持つ。行政の職員も、市域の隅々まで自分の目を見た人はほとんどいないのではないだろうか。公平、公正を重視し、平等な市民サービスを行うのが行政の仕事であり、重要なことである。しかし、これだけ広大な面積の中には様々な地理的条件がある。例えば、人が500メートル移動するのに、まちなかの平坦できれいに舗装された道を歩くのと、常に起伏のある中山間地域を歩くのでは、大きな違いがある。行政によるルールづくりや政策立案の際には、現場感覚を持ち、地域特性に合致したものとなることを期待する。

おおむら じゅん
大村 淳さん

遠州トランジションタウンの言い出しっぺ
ヨガインストラクター



[大村淳さん]
スポーツジムで働いた経験を活かし、現在は
ヨガインストラクターとして活躍している。

●トランジションタウンって？

世界で 1,800 地域を越える。我が国では 30 を超える地域で立ち上がっている。市民レベルの草の根的な取り組みであるが、グローバル経済や化石燃料に頼らない持続可能な社会への移行を目指すもので、自給自立の地域づくりをボトムアップ形式で進めている。

参加者は、自分の好きなことに取り組んでいて、綿花を栽培する綿部、自給自足の暮らしを目指す畑部、様々なエネルギーピークを見据える中でエネルギーのシフト&ダウンを進める遠州電力、畑部と連携したマルシェ部など、多様な部門に分かれて活動している。社会的なインパクトは把握できていないが、意欲ある参加者の力で満ち満ちている。地域通貨も試験的に実施中。単位は 1UNA。ドイツでは、日を追うごとに通貨の価値を下げ、流通を促進することで経済を活性化させた画期的な事例もある。実験は 3 か月目に入るが、地域でしか流通しない通貨システムを、まずは実感してみようと考えている。遠州トランジションタウンブログ:<http://tthamamatsu.hamazo.tv/>

●言い出しっぺになった理由

若い頃、ユーラシア大陸を陸路で横断する旅をした。そこで生活する人々は、モノがなくても笑顔が溢れ、身の回りの自然とともに繋がり安心感に包まれ暮らしていた。一方、日本では、モノに溢れているのに自殺者が多い。そんな日本の社会とのギャップを痛烈に感じ、幸福とは何かを考えるようになった。そんな時に出会ったのが、パーマカルチャーという考え方。自然のメカニズムをライフスタイルに取り入れ、自給自立ができる状態にデザインする手法である。

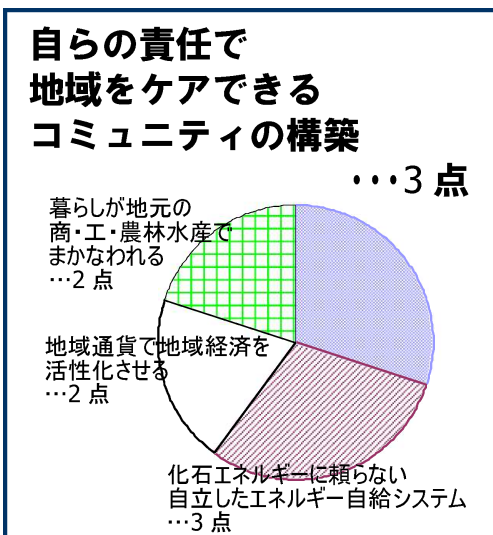
まだまだ修行中の身ではあるが、浜松は、日本の縮図であり、手入れをすれば価値を生み出せる自然に溢れており、デザインのしかたで大いに可能性を感じる。

今後も何かしらの形で持続可能なデザインを浜松に施していきたい。

●アラナイを探せ！30 年後に向けて

これは、トランジションタウン鎌倉の取り組みである。90 歳前後の高齢者は、石油に頼らない時代を過ごし、高度経済成長期を引っ張ってきた。知識の塊である。持続可能な社会においては、ケアしなければならない存在から創造的な存在に変わる。

また、1 人暮らし世帯の増加が課題になるが、空き家などを活用して、共同生活する場を築くことも効果がある。北欧で生まれたコーハウジングといった考え方。家族同様の共同生活の場をつくることで、1 人で暮らす大変さを軽減することができる。



【浜松市への期待度グラフ】

おかべ よしただ
岡部 佳忠さん

双竜木材株式会社取締役部長



【岡部佳忠さん】
消防署員と消防団員のコミュニケーションが
なによりも大事だと語る。

●市民の大切な財産「森林」を災害から守る

中山間地では人家の災害に対する意識は高く、天竜区では住宅用火災警報器の設置率が約90%で、道路が分断されたときには山道を活用するなどの備えもできている。こうした人家の生命や財産を守ることに加え、森林資源の保守も重要である。森林は木材だけでなく、都市部の生活や産業に必要な水を涵養する役割もあるので、山火事の予防はもちろん、火災発生時には延焼を最小限に止めなくてはならない。森林は大切に守って、育てる財産であることを認識し、山間地域特有の災害に備え、特殊な資機材の確保、消防ヘリコプターの出動など万全の態勢を整えてほしい。

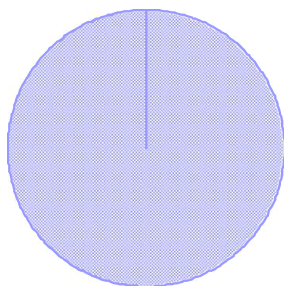
●コミュニケーション促進で官民一体の防災を

災害から地域を守る消防署と消防団は、生命財産を守る両輪である。しかしながら、両者は幹部で協議する場は多いが、現場の最前線で活動する署員や団員が顔を合わせる機会は少ない。このため、災害発生時に一体となった行動が円滑にできないことが危惧される。また、火災現場（特に山間地）によっては水の確保について、署員よりも団員の方が詳しいときもある。機能的に連携してスムーズな活動を遂行するためには、お互いコミュニケーションを図って、フォローし合える意識付けが必要だと感じる。

●木材の新たな活用で森林資源を有益に

大切な財産である森林は伐採・植林などの循環によって、その機能が保たれるのだが、近年は地域材の需要が減少し、供給過多となって伐採ができないため、山林の荒廃が進みつつある。荒廃した山林の（手入れされていない）木材は、住宅資材に適さないので悪循環が生じる。山林を荒廃させないためには、木材の新たな活用方法を研究開発することが不可欠である。木質バイオマスで市民のエネルギー支援を確保できる先進的な都市づくりなど、住宅資材に頼らない新たな活用方法を見出してほしい。

高齢者と現役世代の居住区を 住み分けし、世代別の地域を創 出した先進都市・・・10点



【浜松市への期待度グラフ】

●超高齢化を見据えた先進モデルへ

超高齢化する浜松市の将来推計には誰もが不安を感じるが、これは日本全体の課題と認識している。常識的な政策にとらわれず、たとえば、居住区を高齢者と現役世代に住み分け、地区に合わせた政策を行うのはどうか。高齢者が集う地区ではその支援を充実させる。子育て世代に特化した地区では、子どもを育てやすい政策を行う。同じ境遇の市民が存在することで共感が生まれ、自助、共助、公助のバランスの取れたまちづくりが期待できる。

おかもと まり
岡本 真理さん

添え木の会代表

(元浜松生涯学習ボランティアの会会長)

●充実した生涯学習環境

子育てが一段落したころ、女性の社会進出や自立に興味を持ち「可美女性学級講座」に申し込んだことが生涯学習に携わるきっかけ。その後、主任児童委員や生涯学習推進員など、様々な活動をしていく中で、多くの人々に寄り添って、共に学んで成長をしていきたいと考えるようになり「添え木の会」を立ち上げた。

現在は、可美協働センター生涯学習ボランティアとして、今まで学んできたことを地域の皆様にお伝えする場をいただいている。浜松市内には協働センターが多いため、充実した生涯学習に取り組むことができる。



[岡本真理さん]
添え木の会の活動を通して、生涯学習を推進し、多くの方々の生きがいづくりをサポートしていきたいと語る。

●駅周辺に文化施設や憩いの場が少ない

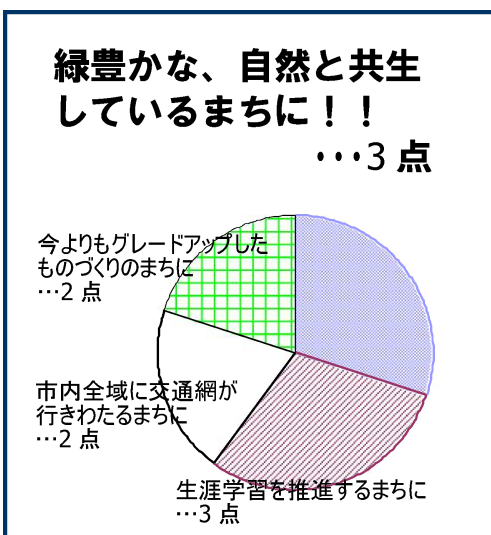
浜松市駅周辺部には、美術館などの芸術や文化に関する施設が少ない。また、緑の豊かさや憩いの場も少ないのではないかと感じている。駅に降り立ったとき「ホッとすまぢだ」と感じられる環境を整備してほしい。さらに、駅周辺部への流れが滞っているとも感じている。これは、公共交通網が発達しているとは言えないため。車の運転をしない人たちにとっては、中心部へ出かけることが難しい。

●できるときに、できる人が、できることをする

今後、超高齢社会になることが予想されている。高齢者が健康で自立した生活を過ごすためにも、生涯学習に取り組み、人との関わりあいを持ってコミュニケーションを図ることが大切ではないか。生涯学習をサポートする側も、それぞれが得意な分野で活躍することで、双方が輝いた生活を過ごすことができると考えている。

浜松市は、生涯学習が非常に進んでいるまちなので、これからも活動の場を広げていきたい。

特に植物には、心身に対してよい影響を与える力があるので、地球の自然環境にも関心を抱いて、人々が住みやすいまちづくりになるような学習を進めたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●生きがいを持てるまちに

都市計画の中では、まちの景観を重視してほしい。美しい自然の見た目と香りで、豊かな心を育てることが、明るい社会づくりにつながる。私自身、アロマセラピーやハーブの持つ力に注目している。多くの方々に、植物が発する効用を体験していただく講座の開催も予定している。今後も活動の幅を広げる要素はあるので、女性や高齢者が生きがいを持って活躍できるまちにしていきたい。

おぐり しげはる
小栗 重晴さん

公益社団法人浜北青年会議所 理事長



【小栗重晴さん】
子どもたちの未来のために、人と人がつながり合い、助け合う「理想のまち」を目指したいと語る。

●全ては未来のために

「理想のまちを創造しよう～全ては未来のために～」

これは、浜北青年会議所（以下「JC」）の今期のスローガンである。私にとって「理想のまち」とは、交通網が整備され、行きたいところへ簡単にいくことができ、商業施設が整備され、欲しいモノがいつでも手に入る都市インフラの充実ではない。一人ひとりが他人を思いやる心を持ち合わせ、地域のために力を合わせることでできる社会。これが、「理想のまち」である。

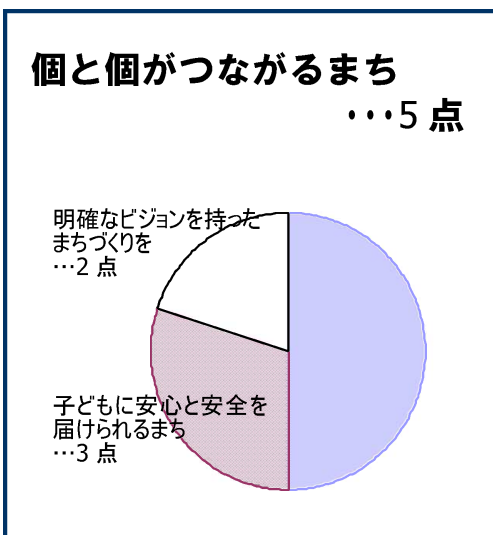
●「学びたい気持ち」、「考えたい気持ち」を育てたい

会社では人を使う立場であり、社員と接して特に感じることは、教育の大切さである。勉強を教えること、テストで良い点数を取るのではなく、「学びたい気持ち」、「考えたい気持ち」をいかに育てるかが重要である。「失敗する前に教えてほしかった」という考えは社会では通用しない。自発的に学ぼうとする姿勢は、社会に出て身に付くものではなく、子どもの頃からの教育で自然と備わっていくものである。学校だけに依存するのではなく、地域が、社会が一体となって「学びたい気持ち」、「考えたい気持ち」を育てて行きたい。実際に JC でも、「考える力の醸成」を目的とした事業を実施し、未来を担う子どもたちの育成に力を入れている。

●親を見て子は育つ

近年、子どもが犠牲者になる報道が目立つように感じる。その中には親からの虐待に関する報道も相当数あり、心を痛めている。これは、親世代のコミュニケーション能力が低下しているのが原因ではないかと考えている。特に浜松は地域の結びつきが強く、結束力が成長の原動力となってきたまちである。それが、近年の様々な通信機器、コミュニケーションツールの氾濫により、人と人との対面機会が減少しており、つきあい方がわからない大人が増えてきたこと

が、社会の大きなゆがみとなっている。子は親を手本として成長するのであるから、現在の親世代にコミュニケーション能力を身につけてもらわなくては、子ども世代にも悪影響が出る。



【浜松市への期待度グラフ】

●明確なまちづくりのビジョンを

30年後の浜松をどうしたいのか、選択肢は無数にある。世界に誇るものづくり企業に代表される工業都市、全国でも有数の生産高を誇る農業都市、もちろん商業都市や観光都市を目指す選択肢もあり、そのポテンシャルもある。まちの未来予想図は行政のみが描くことができるものであり、その責任は重い。ビジョンが明確に示されれば、おのずとまちの形も決まってくるため、慎重かつ大胆なビジョンを期待する。

おぐり まさる
小栗 勝さん

浜松学院大学名誉教授 浜松市社会教育委員長

●全年令対象の教育システムの充実を！

これまで人類が経験したことのない超高齢社会やネットワーク社会の到来を見据えると、次代を担う若者の教育が極めて重要。ICT キッズ育成などはその一例である。

また、時代に適合した中堅の育成に向け、特に、社会科学系の高等教育機関（大学）を設置すべきである。大学と行政や企業との人的交流を図り、政策や企業活動の現場に社会科学的システムアプローチを持ち込むとともに、学問にも現場の実情をフィードバックできるなど、大きな地域メリットが生み出される。

さらに、高齢者の知恵を社会に還元できる仕組みや、様々な社会教育の取り組みの成果を地域社会が共有できる環境をつくっていくことが重要である。

●地域のダイバシティマネジメントを！

私たちが直面する知識社会では、異なる立場で異なる意見を持つ人々が互いにコミュニケーションし新しい考えを生み出すことが可能であり、それを生かすことが重要になってくる。

浜松が持つ進取の気性とチームスピリッツ、外国人集住都市といった特徴を活かし、世界都市としてその先駆けとなるためにも、アフーマティブアクションや、市内の活発な市民活動を結ぶなどして、多文化共生や男女共同参画を一層進めるべきである。

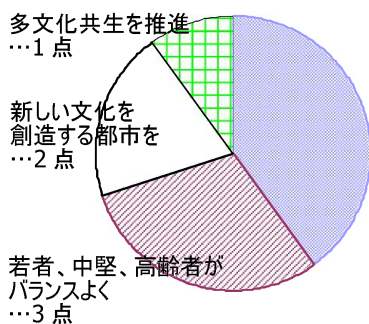
また、WEB をバックグラウンドとして、人と人との交流を一層盛んにし、浜松における新たな産業集積を目指して長期スパンで取り組むことも必要。

今までと違いこれからの時代は、絶えず変化する中で、多様なプロジェクトを同時進行させなければならない。行政はその支援やマネジメントの有効性向上のために、これを担う人材の育成を進めるべきである。



【小栗勝さん】
浜松は世界都市としての自覚がまだまだ不足している。

充実した教育を推進できる都市を ……4点



【浜松市への期待度グラフ】

●世界があこがれるまち「浜松」を！

浜松は、山、海、川、湖など、自然環境に恵まれ、輸送機器や電子機器など様々な産業があり、ピアノコンクールをはじめとした、音楽文化を身近に感じることのできる都市でもある。

浜松にはまだまだ多くの気付かれていない魅力があり、まずは、そうしたアトラティブなものをたくさん見つけることから始めてはどうか。

そして、サンディエゴや京都のように、自らの特色を上手に活かしながら伝統を受け継ぎつつ新たな文化を創造する都市を目指してほしい。

おざき しん 尾崎 真さん

日立建設株式会社 代表取締役



【尾崎真さん】
浜松の未来を担う子どもたちに、助け合いの大切さを身につけてもらうための活動を続けていきたいと語る。

●温暖な気候と自由な発想

浜松は温暖な気候の影響で、豊かな自然に囲まれたまちである。これは、住宅を建てる際にも好条件である。豪雪地帯や台風が多く通過する地域では、屋根の形や窓の大きさに制限がかかってしまうが、この地域では、自然環境により住宅のデザインが制限されることはない。お客様の共通するニーズは、耐震の強度くらいである。温暖な気候により生活に制限を受けず、自由な発想をしやすい環境は、ものづくりのまちとして浜松が発展してきた礎となっているのではないかと感じる。

●つながらないまちにより、人の絆は断ち切れようとしている

まちなかの衰退が危惧されて久しい。まちなかには文化施設や病院、店舗などが多く立地しているが、それらをつなぐ動線が確保できておらず、人々が集まり、交流する場がない。その影響なのか、人とのつながり、絆、協力といった意識が薄くなってきているように感じる。私の会社でもそうだが、魅力的な商品がなければ人は来てくれない。まちなかにも人々の興味をひきつける魅力的なイベントを多数行うことができれば、人が集まり、交流が進み、絆も取り戻せるのではないかと感じる。建設業に携わる身としても、人と人をつなぐまちづくりの一翼を担っていきたい。

●まちづくりは人づくり

30年後を見据えたまちづくりのために重要なのは、「人づくり」である。まずは、未来を担う子どもたちに協力の精神を身に付ける教育が必要である。私は青年会議所にも所属しており、子どもたちを対象にしたイベントを多数実施している。教育と言っても、押し付けではなく、大人が混ざって、協力、共助の大切さを体験を通じて実感させていきたい。

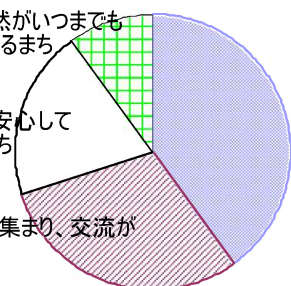
地域が持つ魅力を効果的に発信されているまち

…4点

豊かな自然がいつまでも守られているまち
…1点

高齢者が安心して暮らせるまち
…2点

多くの人が集まり、交流が進むまち
…3点



【浜松市への期待度グラフ】

●魅力の再認識と発信を

浜松の魅力は、食べ物、自然、文化と、挙げればきりが無い。これだけ恵まれた環境に育っていると市民は「あって当然」と思ってしまい、このまちの本当の魅力を自覚できていない。浜松の素晴らしさを再認識し、強く発信していくことができれば、今まで以上に人を呼び込めるのではないかと感じる。静岡県や浜松市は、「通過するまち」と揶揄されることもある。しかし、多くの人が一瞬でもこの地に足を踏み入れているのであれば、「ちょっと寄ってみようかな」と思わせるだけでよく、遠くから人を呼び込む必要すらない。大都市の間であることを最大限に活かすべきである。

おだぎり かつこ
小田切 克子さん

行政書士・社会保険労務士・ファイナンシャルプランナー
男女共同参画アドバイザー



[小田切克子さん]
女性の経済的・精神的自立を応援するため
精力的に活躍されている。

●1日を楽しめるまちづくりを

仕事などで他都市の人と関わることが多いが、市内企業を話題にすると浜松のことを早くわかってもらえる。それだけ日本・世界を代表する企業が輩出している都市と言える。また、海や山など浜松市は大自然にも恵まれているが、他都市からのお客様や友人に案内する観光地や名産品はあまりない印象。

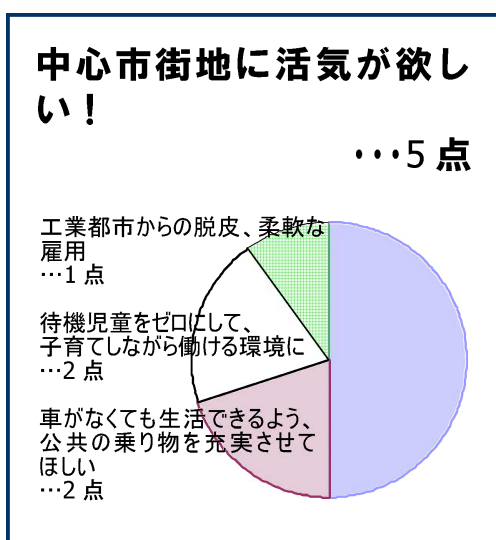
中心市街地も静岡市と比較すると活気が足りないと感じる。浜松で1日を楽しめる空間づくりが必要だ。

●目指せ！待機児童ゼロ

浜松市は待機児童が多い。認証保育所をもっと活用するべきだ。認証保育所と認可保育所を比べた場合、一般的には認可保育所の方が人気は高いが、認可保育所は定員いっぱい保育士の目が行き届かないのではないかと心配し、人数に比較的余裕のある認証保育所を求める保護者もいる。認証保育所への支援を拡充することで、入所数のアンバランスを解消できる。ぜひ待機児童をゼロにして、子育てしながら働ける環境をつくってほしい。

●「働き続けられる」「再就職できる」「起業できる」環境づくりを

今後の少子高齢化を考えた場合、いかに働き手を確保するかが重要であろう。そうした点からも、女性が働く上での支援は必要である。女性の起業に対しては、資金面、あるいはオフィスの提供等のバックアップを行政としても積極的に行っていくべきだ。そして、女性が結婚・出産をしても、「働き続けられる」、退職しても「再就職」や「起業」ができる、そのような環境づくりを同時進行で整備することが重要だ。



【浜松市への期待度グラフ】

●真のワークライフバランスを目指して

市内企業に対して、ワークライフバランスの講義を行っているが、まだまだ認知度が低い。少子化を食い止めるためには、男性を含めすべての働く人のワークライフバランスを整えていくことが必要だ。ライフを充実させることが、ワークの充実にも繋がる。つまり、ワークライフバランスの考え方は、女性だけのものではなく、男性にとっても、雇用者・会社にとっても大切な考え方である。

工業都市である浜松は、この分野はまだまだ発展途上である。真のワークライフバランスを定着させ、男女共同参画社会を構築することを目指していきたい。

おの ひろし 小野 宏志さん

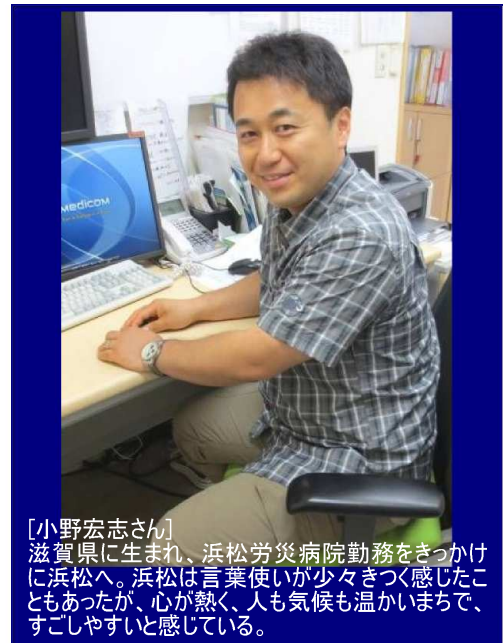
坂の上ファミリークリニック 院長

●患者、家族、社会を支える医療に取り組む

坂の上ファミリークリニックを開院して8年。患者を支え、家族を支え、社会を支える医療に真剣に取り組んできた。外来診療だけでなく、往診を発展させた在宅医療に力を入れている。地域社会で見守るという観点から、在宅医療の必要性は益々増大する。

住み慣れた我が家で安心して看病を受け、充実した医療を受けられることは、患者にとっても家族にとっても大切なこと。

今後も、患者や家族が不安にならないよう、地域社会の一員として様々な問題に対処していきたい。



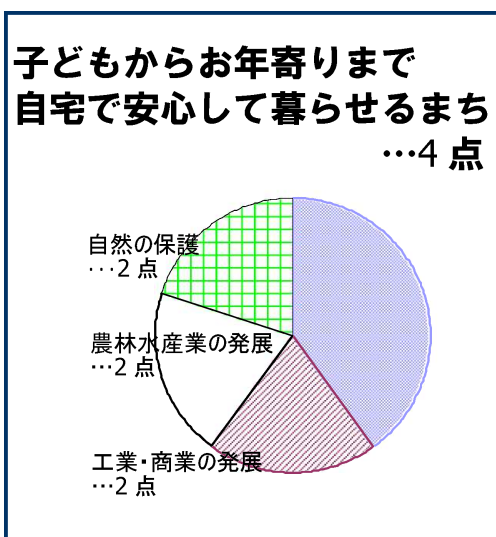
●浜松市は浜松市民がつくる

浜松市は、山間地から海、湖まで、豊かな自然に恵まれ、“やらまいか”の市民気質を土壤に、世界に誇る産業などが成長してきた。また、救急やホスピス等、医療体制も他都市に比べて整備されている。

ただ、日本全体の傾向かもしれないが、最近“やらまいか”気質が弱まってきていると感じる。高齢化が進み、人口が減る中で、行政だけに頼ることなく、国は国民が、市は市民がつくるという気概が必要。浜松市は浜松市民がつくるものとして、これからの時代こそ“やらまいか”気質が問われてくる。

●自宅で最後まで暮らせるように

在宅医療に取り組み、これまでに、およそ1,500人の患者を本人の自宅で看取ってきた。



【浜松市への期待度グラフ】

自分の家族の命は、人任せではなく、自分が責任を持ち、自分たちで看取る。つらいこともあるが、最後まで看取することで、気持ちがつながれていき、命が受け継がれていくことを実感できる。その経験は必ず人生の糧となる。

超高齢社会を迎え、人と人とのつながり、家族のサポート、地域のサポートが益々重要となってくる。30年後に向けて、子どもからお年寄りまで自宅で安心して暮らせるまちづくりを望む。私自身、家族を想う優しい気持ちと、住み慣れた家で家族と一緒に暮らしたいという患者の気持ちを応援し、安心して暮らせる地域社会づくりに引き続き貢献していきたい。

かじの なおゆき
梶野 尚之さん

浜松ホトニクス株式会社

環境省認定 うちエコ診断員、浜松市地球温暖化防止活動推進員

●人の繋がりを感ぜられる「まち」創りを

浜松市は多種多様な産業や自然環境を持ち、それらのメリットを活かして成長している。成長の要因の一つには、「やрмаいか精神」を発揮し、市民がリーダーシップを持ち活躍していることが挙げられる。しかし、浜松駅周辺に関しては、私が子どもだった 20 年前頃からあまり発展していない。東京のような都心の近代的な「街」を目指すのではなく、自然と活気に溢れ、市民のコミュニケーションの場となり、子どもたちが安心して出かけられ、人の繋がりを感ぜられる「まち」を創ってほしい。



●充実した子育て環境の継続を

私にも 3 歳になる息子がいるが、浜松市の子育て支援には満足している。担当の保健師が自宅に訪問してくれる制度や、子どもの教育施設などの設備環境も充実していて、子育てをサポートする体制が他の自治体に比べて充実していると思う。今後は、財政状況により事業縮小の検討が行われることも考えられるが、是非、この充実した子育て環境を今後も継続し、浜松市が全国から「子供を育てやすい町」と言われるように取り組みを推進してほしい。

●女性の社会復帰だけが支援ではない

女性への支援は社会復帰だけではないと思う。子どもを自分の手でしっかりと育てたい母親も、金銭的な問題等により、十分な子育ても出来ないまま、保育所などに子どもを預け、仕事をしなければならない場合がある。子育てに積極的な家庭をサポートするしくみや、家族が協力して子育てできるライフスタイルを提供することが必要だ。女性に対する支援については様々な方法があると思うので、行政と企業が一体となって改革に取り組んでほしい。

子どもが安心して育てられる制度・設備・コミュニティがあるまち …5点

自然と共存する
エコシティ(再生
可能エネ導入、環境
教育推進、防災対策)
…3点

高齢者社会を逆に最大
限活かすまちづくり
(安全な交通、高齢者の
社会貢献)
…2点

【浜松市への期待度グラフ】

●「もったいない」という考え方を広めたい

環境問題は市民の日頃の生活における取り組みが最も重要だ。日常生活では「もったいない」という気持ちを持つことが大事である。「もったいない」という気持ちがあれば、ゴミが減り、節電につながり、お金も貯まり、良いことばかりである。この考え方を少しでも多くの人に伝えていきたい。高齢者の方は多くの「生活の知恵」を持ち、「もったいない」を普段の生活で無理なく実践している。「生活の知恵」を次の世代に伝えるために、高齢者の方が学校や公民館で講演などを行い活躍できる機会を提供することで多くの人々が学び、めぐり合うことが出来るような取り組みを進めていきたい。

かとう ひろみつ
加藤 寛盛さん

NPO 法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会 事務局長



[加藤寛盛さん]
精神疾患や引きこもりなどに対する正しい知識を広めることで、地域が理解し、温かく見守り支えてくれる社会を目指す。

●障がいやひきこもりに正しい理解を

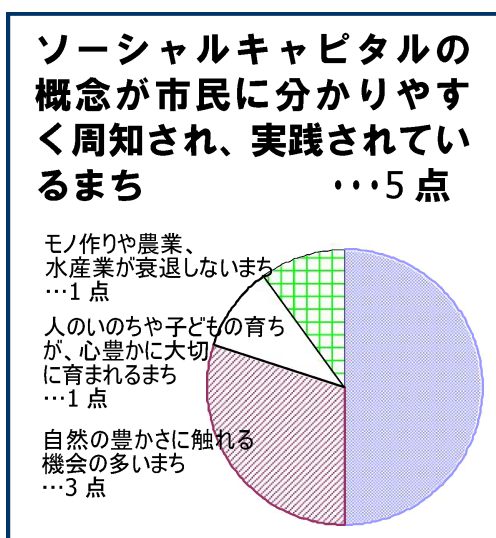
NPO 法人で活動をして約 8 年。精神保健福祉士として、市内の引きこもりやニートの子を抱える世帯を訪問し、直接本人と話すことで、解決の糸口を探っている。また、「浜松子ども・若者サポートネット」などの活動を通じて、精神疾患を抱えた若者に対する就労支援も行っている。障がいを持つ人や引きこもり状態にある人に対する健常者の偏見を取り除き、正しい知識や理解を広めることが重要である。このほか、時代の要請もあり、中小企業に出張セミナーを行うなど、就業者のうつ、自殺対策にも携わっている。

●中心市街地活性化と子どもが思い切って遊べる公園の整備を！

浜松駅周辺、中心市街地が寂しい。買い物ができる百貨店が少なく、大型ショッピングセンターが郊外に集まり、買い物がしにくい。現在、東区に住んでいるが、小さな子どもを遊ばせるような、公園が少ないように感じる。特に、幼児から幼稚園児くらいまでの子どもが安全に遊べる場所をもっと整備してほしい。また、動物園、フラワーパーク、フルーツパークなどの公共施設にも勾配が多く、小さな子どもを抱える親としては、移動が大変というのが実感。

●ソーシャルキャピタルと自助、共助の精神を育むことが重要

今後、今まで人と人が繋がり成立していた地域社会が成立するのか不安を感じる。超高齢社会を迎え、インターネットが普及する中、核家族化や、人間関係の希薄化なども進み、対人コミュニケーションの量と質が絶対的に減っている。こうした地域を支えていくためには、ソーシャルキャピタル、自助、共助の精神を育むことが重要である。このような精神を市民が共有し、実践されるようなまちになることを望む。今後の政策も、人や地域を育てる、世代をつなぐということに重点を置くべき。私自身、現場で感じることを、様々な機会を通じて発信していきたい。



【浜松市への期待度グラフ】

地域を支える存在になる子どもたちを育てる親も、しっかりと子育てに向き合い、子どもが心身ともに健やかに育ち、心豊かに大切に育まれるまちになってほしい。

かとう やよい
加藤 弥生さん

浜松市消費者団体連絡会

●消費者の安全安心のために地域で連携を！

消費者の安全安心を守るためには、地域で相談できる体制づくりが重要と考えている。

消費者団体について、水窪など合併市町村の中で、活動がない地域や、あっても十分な連携が取れていない地域がある。まずは、出前講座などを通じて、他地域との接点をつくっていききたい。

また、悪質商法によるトラブルが多いこともあり、消費者教育の対象を、小学生や高齢者だけでなく、食育などを通じて、幼児などにも広げていきたい。



[加藤弥生さん]
税金や年金、介護保険料など個人負担が高くなり、将来に不安を感じる。

●地域全体で、子どもを見守り育てる環境を！

昔に比べ、地域で子どもたちを気にかけてたり、叱ることが少なくなってきた。また、家庭でも、登校拒否などの子どもたちの切実な問題に、正面から向き合うことが減ってきたのではないかと感じるが多々ある。

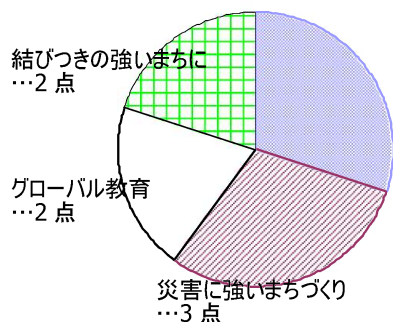
地域でのつながりにより、子どものことを話し合い、子育ての環境づくりが必要である。子どもたちには、グローバル化に対応できる様々な体験を通して、豊かな対人関係を培ってほしいと考えている。

●互助共助により、安心な生活環境づくりを！

今後、人口が急速に減少していく中、公的コストを抑え、維持可能なまちづくりを進めるためには、家族や地域の人たちが、お互いに助け合う共助の意識を高めることが求められる。

これから、老若男女を問わず、お互いを認め合い、理解し合うことが、大事であって、近くの住民同士で、定期的に話し合う「しゃべり場」をつくることも良い方法と考える。

公的コストが抑えられたまちを…3点



【浜松市への期待度グラフ】

●元気なまち浜松の実現を！

今、浜松は、製造業の生産拠点が海外進出を進めるなど、これまでと違って、ものづくり産業を取り巻く環境が非常に厳しくなっている。また、まちなかや駅から市役所までのエリアを見ても、人の流れも物の流れも感じられない。

浜松は、自然環境に恵まれ、交通の便も良い。食べ物や特産品も豊富にあり、他地域の人たちから、羨ましがられることが多い。浜松がこうした魅力を十分活かし、再び、県内・全国で最も元気のあるまちとなっ

かみじま ひろし
上嶋 裕志さん

姫街道連絡協議会 会長

いにしへの町づくりの会 主宰

●生産拠点としての魅力を！

ものづくり都市として、多くの企業の発祥地であることは自慢できる。しかも、本社が市外に出てしまった企業や生産の拠点が海外となり、それに伴い中小企業も海外生産となりつつある。市内に魅力のある生産拠点をつくりだしていないことが問題である。また、テクノポリスも、知識集約度の高い産業構造を持つ地方都市の創造を基本理念として掲げてきたが、現在は地元の雇用や技術向上に活かされていのではない。

企業立地の点では、浜松駅から大都市に行く時間は短縮されている一方で、市内の移動時間が長いことは商談や会議に不利である。30年後には、浜松駅を中心とした地下鉄で移動時間を短縮するとよい。環状線はレールバスにすればよい。

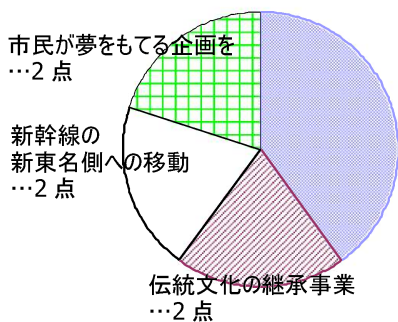
●管理者不明の土地の問題を解決する

資産価値の無くなった山林や農地には相続登記の手続がされずに、管理者不明の土地がある。時をおいての相続や道路事業・農地集約事業を行うときには、遡っての相続人すべての同意が必要となるため、相続手続や事業の執行に大きな支障を来す。30年後には、未相続の土地問題が更に増えると思われる。行政の積極的な対応が必要だ。

田舎に住みたい、自給自足をしたいという退職後の人たちがこれから増えるのではないかと考える。管理者不明の農地問題を解決してクラインガルデン（宿泊施設付きの市民農園）などに変え、地元の住民が農業指導をするような仕組みをつくれればよいと考える。管理者不明の土地の問題解決は、中山間地域の活性化にもつながるのではないかと考える。



都市交通の充実～浜松駅を中心とした地下鉄や浜名湖東岸のモノレールを…4点



【浜松市への期待度グラフ】

●若者にもっと活躍してほしい！

以前は若者リーダー養成事業もあり、地域で何かやりたいという若者が集まれる「場」があった。若者たちが企画立案できるよう、まずは行政指導で地域づくりや仲間づくりのテーマをもとに「若者塾」のような場を協働センターに設けたい。30年後、このような若者が地域活動を担っていかなければならないと考える。

浜松市には多くの伝統文化や歴史文化もあり、これらは、「ふるきを訪ねて新しい文化を創る」地域を活性化できる可能性を秘めた資源である。また、歴史・伝統文化とその魅力を伝える、後継者が少なく浜松市全体の問題として捉えて、行政からの伝承事業への支援や地域と連携し担い手を増やす事業を行う必要がある。

かみや かずき
神谷 和輝さん

浜松市消防団第24分団所属

●子どもたちの笑顔が溢れるまちづくり

大学時代に大学が公民館と連携して講座を開き、そこで子どもたちにスポーツ指導などを行った。その際、ボール遊びを通じた子どもの運動能力の低下や子どもが蝉取りの方法を知らないことに驚かされた。

行政主体ではなく、大学や市民活動団体などが中心となって、公民館講座などを通じ、子どもたちに虫取りやボール遊びなどを教える機会が増えればよいと思う。

また、子どもを産み、育てやすい環境をつくる施策を進めて子どもを増やし、子どもたちがみんな笑顔で、外で元気に楽しく遊べるまちづくりを進めてもらいたい。

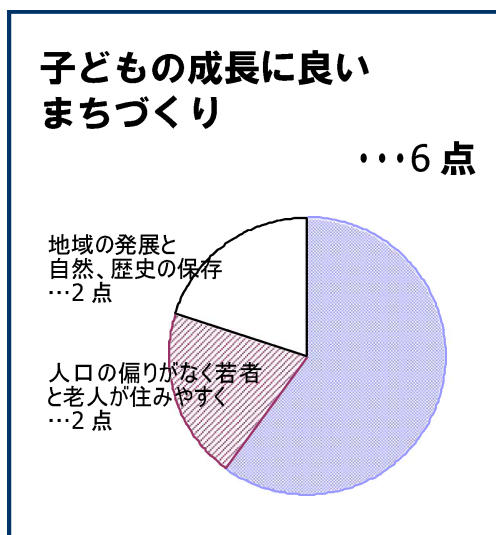


●大学生などが消防団員に！

大学2年生から消防団員として参加しているが、当時浜松市では、大学生の団員は自分一人だけと言われた。現在、大学を卒業し、社会人となったが、自分より年下の団員に出会うことはない。

浜松市の消防団を支えているのは40代の人たちである。他都市では、女性や大学生などが消防団に参加している。浜松市には、数多くの大学や専門学校が存在しており、これら学生が消防団員となれば、仕事を持って消防団に参加している人よりも、時間的に融通が利く分、緊急時に迅速な対応ができる可能性がある。

自分もそうであったが、当初は、大学生が消防団員になれないと思っていた。しかし、大学生でも消防団員になれることを知り、参加した。知らないために参加していないということも考えられるので、もっと積極的にPRすればよいのではないか。



【浜松市への期待度グラフ】

●まちブラが楽しめる「まちなか」を

浜松のまちなかは行っても楽しい場所ではない。

買い物をせずただブラブラしているだけでも楽しめる場所に変化してほしい。

浜松人は、ガソリン代をそれほど気にしないが駐車料金を気にするように感じる。まちなかの駐車場は2時間くらい無料化とすれば、もっと人が集まる。

また、暇つぶしから情報を入手する人が多いので、もっとフリーペーパーを活用して、「外に出るきっかけ」をPRしたらどうだろうか。

か も ひろ こ
加茂 博子さん

JGAP 指導員
エコファーマー



●地元のの人に地元の食材を食べさせたい

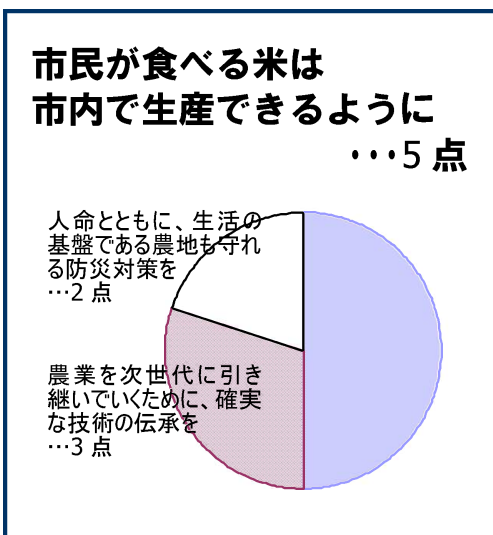
私の生産した米を食べてくれた人が、生産者が私だと知らずに「地元でもこんなおいしいお米がある」ということを言っていたことを知ると、本当に幸せな気持ちになる。現在は、直売や小売店舗への直接卸を中心に販売をしており、相手の顔が見える商売をしている。静岡県は米の輸入県であるが、地元でもおいしい米をつくることができるということを地元の人にもっと知ってもらい、静岡県民の食べる米は静岡県内で生産できるようにしたい。

●その昔、私の水田にも津波が来ていた

大学の研究者が過去にどの辺りまで津波が来ていたかを調べたことがある。現在耕作している水田にも津波が来ていたということがわかった。先日、田を耕していたら、大きな岩が出てきた。これも、きっと過去の津波で流れてきたものではないかと考えている。防潮堤の整備も進み、津波から人命を守ることができるかもしれないが、田んぼが海水に浸かってしまったら、しばらく稲作はできない。生活の基盤であるだけに、行政には防災対策や迅速な災害対応を期待したい。

●限られた学びの機会を大切に

就農を希望する若者が増えているように感じる。県の制度等を活用し、1年間の就農経験のある人を雇用したこともあるが、本当に農作業に従事していたことがあるのか疑問に思うくらい、何も知らなかった。農業従事者は、自分の持っているノウハウを教えることに慣れておらず、新規就農者も、世代のギャップもあり、コミュニケーションがうまく取れていないと感じる。農業は1年サイクルの仕事であるので、1つの作業は1年に1度しか経験できず、学びの機会は限られている。農業従事者、新規就農者が互いに歩み寄りながら、次の世代の農業のため、限られた学びの機会を大切に、技術、ノウハウの伝承を行ってほしい。



【浜松市への期待度グラフ】

●補助金行政の次の展開は

将来の人口減少とそれに伴う税収の減少から、農業振興のために行政が補助金を拠出し続けるには限界がある。補助金以外の方法で行政が農業振興を行うとしたら、情報発信の支援ではないか。農地を貸したい人と借りたい人のマッチング支援や、販路開拓のためのプロモーション、さらには、6次産業化のための手法の支援、働き手を求める人の支援などを行政が効果的に行うことにより、情報の送り手・受け手ともに信用力の高い情報の授受ができ、効果的である。

かわい しょうじ
川合 正二さん

浜松市消防団中区支団所属

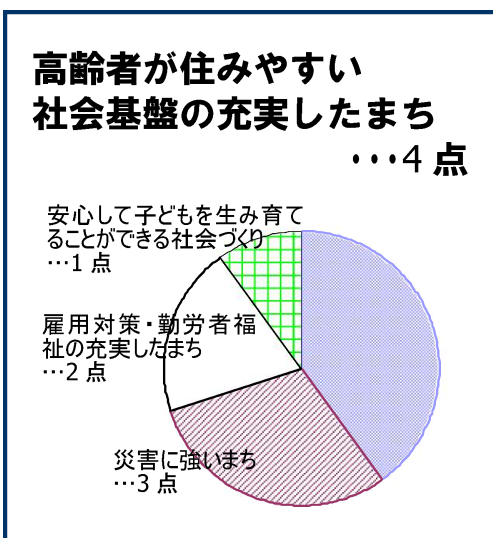
●市民一人ひとりが地域を守る一員！

防災対策を進めるに当たり、市民の果たす役割は大きい。災害が起こった時、市民の行動によって被害を未然に防ぐことが可能である。例えば、タンス等の家具を固定することで、家具が倒れて下敷きになってしまうといった被害を防げる。防災についての知識を習得し、実際に行動をとり、地域を守る一員だという認識を市民一人ひとりが持ってほしい。

また、防災に関して意識の高い自治会長がいる地域では、地域の意識も高いと感じる。やはり先導的な人の意識が高いことは大切である。消防団としては、プライバシーの課題はあるが、高齢者で一人暮らしの人を把握し、災害時に役立てるよう、消防団・民生委員・自治会とのネットワークを構築することが必要であると考えている。

●経験値がものを言う！

分団ごとに団員数・年代が様々である。郊外には5年ほどで団員が交代する消防団もある。私は多くの経験値を積むことによって災害に対する適切な行動がとれ、二次災害を未然に防ぐことができる。しかしながら、実際には経験の少ない団員だけで出動する時もある。その時には、上に立つ幹部がしっかりと指揮をとることができれば良い。行政には、火災だけでなく、風水害等の様々な災害時に消防団をもっと活用してもらいたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●BFC・浜松まつりを通じて人員確保！

人員の確保に当たって、自治会からの推薦や自治会長が勧誘に行くという方法が良いと考えている。しかしながら、現実的には大変な手間と時間がかかる。

BFC（少年消防クラブ）の活動は、地域の消防団と子どもたちの繋がりをつくる。消防団員との会話や実際に消防車に乗っての広報活動により、消防団に憧れを持ち、大人になった時に入団してくれれば幸いである。また、伝統ある浜松まつりで若者を勧誘することが一番多い。地域コミュニティの確保、また、消防団員との縦のつながりによって人員の確保ができていく。

それぞれの地域で団員の確保が難しい状況ではあるが、地域に根付いた活動を通して団員確保の努力をおこなって行きたい。

かわい まさし
河合 正志さん

浜松まちなかにぎわい協議会事務局長



●まちづくりの組織づくりが重要である

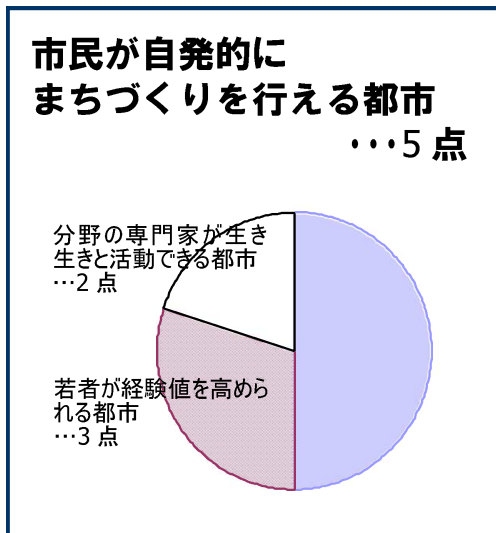
まちなかの店舗の業態について、物販店舗が減少し、飲食店が増加してきていると言われているが、これは、消費動向がモノの消費から時間消費にシフトしてきている。しかし、その傾向がいつまで続くかは予測不能である。まちなかにぎわい創出に必要なのは、正解を見つけようとするのと共に、過去の成功体験に固執することなく時代の変化に柔軟に対応できるまちづくりを行う組織をつくることであると考えている。

●子どもたちでにぎわうまちなか

まちなかにぎわいの創出という、どのような店舗を入れるか、古くなった建物をどのように改修していくかなど、ハード整備から入る手法もあるが、他の方法もある。近年、子ども向けの職業体験施設が注目を集めているが、まちなかの店舗が子ども向けに講話を行ったり、職業体験を行ったりして、まちなか全体をテーマパーク化する方法もある。実際に、浜松こども館には多くの親子が来館している。その子どもたちがこども館からまちなかに出てくる仕掛けづくりがうまくできれば良い。

●行政職員はその役割を再構築する

仕事の関係上、行政機関の職員と仕事をする機会が多い。規制を扱う部署の職員は関連する法律知識があることは間違いない。しかし、法律事項ではなく、ある分野の振興や活性化など、テーマに沿った業務を行う職員は、その分野の専門家と比べ、実践的な経験が多くはない。これは、職員が定期的に異動するため、仕方のないこと。これからの行政の仕事は、分野で信頼のできる人や組織を見つけ、その人が仕事をしやすいように規制を緩和するなど、後方支援の仕事に徹した方が、上手くいく場合もあると思う。



【浜松市への期待度グラフ】

●浜松の若者にもっと経験を

以前、広告関連の仕事をしていた経験があり、テレビコマーシャル制作では、東京の企業は数千万円の制作費であるのに対し、浜松の企業の制作費は数十万円程度であった。これだけ金額が違えば、同じ1本のCM制作でも、経験する仕事内容が相当変わってくる。仮に同じ能力の人が東京と浜松で仕事をしていたら、こうした経験値の差が、その分野での能力の差につながってしまう。浜松の若者がもっと経験値を積むためにも、本物に触れ、多様な経験を積むことができる環境がもっとあれば良い。

かわぐち よしいち
川口 好市さん

とみつか未来塾 代表

●子どもたちの健やかな成長を目指して

「とみつか未来塾」は、未来を担う子どもたちが自然とふれあい、健やかに成長するようにと願いを込め、富塚地区を中心に様々な活動をしている。

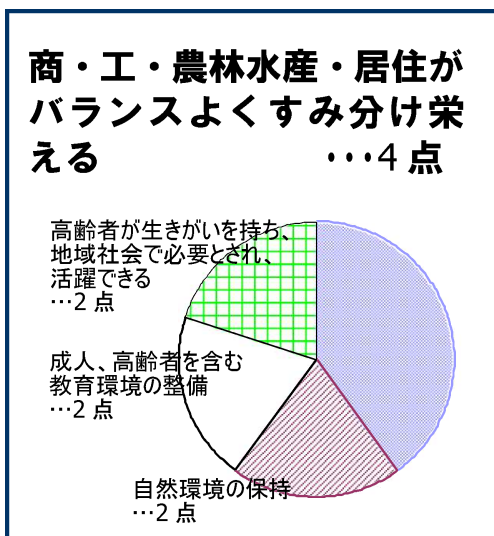
個人単位で田畑を借用して農作業する体験とは異なり、会員（親子）と未来塾のボランティアスタッフとで共同作業を行う。お互い見ず知らずの子どもたちや若い世代の父母、高齢化したボランティアスタッフとの世代を超えたコミュニケーションは、収穫の喜びを共有し合い、活動が大いに活性化する原動力となっている。現在塾生は 45 世帯、132 名が登録し、平成 24 年度は延べ 1,519 名が活動した。



●ものづくりの集積地、他に誇れる交通システム

昔から浜松市は自動車や楽器などの製造業の集積地であり、産業の成長に伴いこの地域は発展を遂げてきた。しかし、経済・社会情勢の変化により、地域の町工場などが倒産していく姿を見て、製造業にとって、大変な時代になったと感じている。そんな中、市民も行政も、今まで培ったものづくりの DNA を継承し、何ごとにも創意工夫で挑戦する気概をもってまちづくりに取り組んでほしい。

また、浜松市の中心街はきれいで、浜松駅前のバスターミナルに向かうと、スムーズに目的地に向かえるバス交通の設備や案内、サービスも行き届いており、他の都市と比べても誇れるシステムであると感じる。更なる活性化に向け、地域や中心街での企画やイベント情報を、官民一元的に情報共有を図って、市民が必要な情報を簡単に知ることができる仕組みがあるとありがたい。



【浜松市への期待度グラフ】

●自然とのふれあいを通じて、地域の「絆」を育てる

「とみつか未来塾」は、10 年以上にわたる、地域の河川の美化活動や農業体験などを通じて、「生命の大切さ」、「自然との共生」、「人と人との交流や心のふれあい」、「労働の大変さや実りへの喜びと感謝」など、子どもたちの心の成長を促してきた。

様々な活動を親子や仲間と行うことで、同じ地域で生まれ育った「緑」が地域の「絆」を強め、地域コミュニティが育ち、活動が子育ての原点となる家族とのふれあいの時間に繋がる。これから益々このような活動が重要になってくるだろう。

かわせ こうし
川瀬 幸嗣さん

エネルギー使用合理化専門員、環境カウンセラー
労働安全衛生コンサルタント、浜松市環境学習指導者

●地域全体でコミュニティづくりを

今後、核家族や単身世帯が増加すると言われている。時代は逆行しないから、再び拡大家族が形成されることは難しいだろう。かつての拡大家族のような各世代が助け合う関係を、まち全体でコミュニケーションを取れるようなしくみがあれば良いのではないだろうか。今までは、アメリカやヨーロッパを見習って、産業等発展させてきたが、この高齢化社会・人口問題に関しては世界の先進国となる。日本が試行錯誤して解決しなければならない。世界の見本となることが求められるだろう。

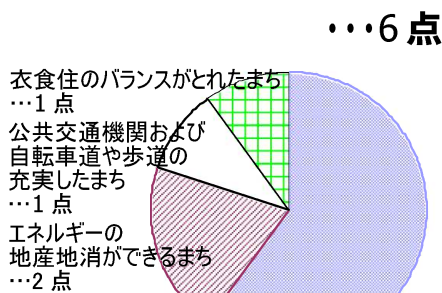


【川瀬幸嗣さん】
経済合理性を伴った実現可能な環境教育を推進していきたい。

●環境先進都市をめざして

浜松市が再生可能エネルギーを推進していることに感心している。浜松市は温暖で日照時間が長いことから、太陽光発電等により、地の利を活かしたエネルギーの創出を目指すことは、今後も推進してほしい。浜松市には自動車及びオートバイメーカーがある。そこで、太陽光発電等を普及させるとともに、二酸化炭素及び有害ガスを排出しない電気自動車、電気オートバイ及び電動アシスト自転車を普及させることは、浜松市にとって非常にアドバンテージのあることだと思う。浜松市にはまだ自前のエネルギーが少ない。自らエネルギーをつくり出し、そのエネルギーを利用して産業を発展させることが、効率の良いエネルギーの地産地消となり、災害にも強くなる。浜松市の主な交通手段は車であり、30年後としても車社会は変わらないと思われる。電気を使った交通機関や輸送用機器を整備することは、環境先進都市・環境産業の育成として浜松の強みになると思う。

若者から高齢者まで生涯にわたって働ける環境・産業があるまち



【浜松市への期待度グラフ】

●実現可能な環境教育の普及

最近、環境問題への意識が高まり節電が盛んであるが、省エネの指導をしていると、エアコンの温度上げることや照明を消すなど多少無理をしなければならない省エネに取り組んでいる。実は見えないところでエネルギー捨てていることが多く、私の活動を通して効率の良い省エネを普及させたい。

また、今の省エネは経済合理性と切り離されてしまっている場合が多い。環境問題を解消するにも、経済合理性が備わっていなければ、実現困難なのが現状だ。現在、企業レベルでは初期投資を補助してくれるESCO事業等があるが、個人向けにも同様のインセンティブを与えるような政策を整備して、正しい知識が普及すれば、益々省エネが進むと思われる。